

京都産業大学本 「洛外図屏風」(八曲一双)について

村 上 忠 喜

はじめに

京都産業大学日本文化研究所では、2021年度・22年度の2カ年度に分けて、思文閣美術出版より「洛外図屏風」八曲一双を購入し、本学図書館蔵の資料とした。本稿はその作品解説を試みたものである。

本図は2020年の春、京都市東山区の思文閣ギャラリーにて展示されていた時に、たまたま村上が目にした。あまり類例のない画題と内容であるので気には留めていたものの、なかなか改めて調査を行う機会に恵まれなかったが、2021年10月30日に、本学日本文化研究所(以下「日文研」という)のメンバーである並松信久教授(経済学部・当時日文研所長)、鈴木久男教授(文化学部・日文研所員)、笹部昌利准教授(文化学部・所員)と村上(文化学部・所員)の4名で本品の特別観覧を思文閣美術出版にて行う機会を得た。検討の後、2022年2月に左隻、同年5月に右隻を京都産業大学図書館に納品、同年10月に写真撮影を行った。また、同年11月には日文研研究例会として、同図の特別観覧と村上による作品解説を京都産業大学図書館ホールにて行った。

本品はこれまでほとんど知られていなかった洛外図であり、これまで知られている他の洛外図屏風と比して時代こそ下がるものの、洛外図自体の類例が少ないので、紙面を借りて紹介するものである。なお本品は〈京都産業大学本「洛外図屏風」〉とし、本稿においては「京産大本」と呼称する。(口絵【図1】【図2】参照)

1 形状と状態

「洛外図屏風（京都産業大学所蔵）」八曲一双は、江戸時代後期の作とみられる紙本着色の作品で、片隻の総高 1700、総幅 4840、折りたたんだ際の厚みが 131（単位ミリメートル）である。本紙部分の法量は左右とも、第 1 と第 8 扇はタテ（天地）が 1538、ヨコが 531 で、第 2 から第 7 扇はタテ 1538、ヨコ 600 である。落款及び印はない。また美術商からの購入であり伝来等は不明である⁽¹⁾。

右隻第八扇の下方に裂けの補修痕が認められる他、両隻とも各扇の端、屏風の折り目部分に若干の顔料の剥落がある程度で、全体として状態はすこぶるよい。また表装は近年施されたものである。

2 画面構成

図の内容は、京都の町の周囲を取り巻く、山、川、湖沼、名所・旧跡、寺社、町や村落、道路、橋などの景観とそこに集う人々を入れつつ、鳥瞰図的かつ詳細に描写したものである。洛中の描写はほとんどなく、洛外の寺社や村落、道路や橋に関わる描写が細かい。

付箋は右隻に 87、左隻に 114、計 201 枚が貼られている。1 枚はがれた箇所があるので、当初は 202 枚であった。

画面構成は、洛外図の定石通り京都の東側を右隻、西側を左隻に描く。図 3・4 は画面の大まかな構成を記すために付箋が貼付されている表記そのままに番号を振ったもので、【図 3】は右隻、【図 4】は左隻である。

右隻は伏見稻荷大社、五条大橋からはじまり大原、八瀬、上賀茂社までの鴨東の名所と村々が描かれる。画面下部に鴨川が滔々と流れ、その下部（西側）に町家群が描かれるが、高瀬川以西の町家はすべて金砂子や銀砂子による雲に覆い隠される。高瀬川と鴨川両岸の町家群は丁寧に描かれるが、この当時

その東側に広がっていた町家群の多くも金銀雲に隠される。おもしろいことに三条通りより北の岡崎や白川さらにその先の高野川沿いの村落は、金銀雲に隠されていない。

左隻は梅ノ尾、菩提の滝、千束村からはじまり、谷観音、離宮八幡宮までの西山や洛西の名所と村々が描かれる。画面下部には二条城も描かれ、その北側に西陣あたりの町家も描かれるが、右隻同様洛中の町家群は金銀雲に隠される。

描かれている内容、かつ八曲一双という装丁からしても、洛外に視点をおいた「洛外図」であることは間違いない。それも名所だけにフォーカスしたのではなく、村々とそれ等に至る道や橋に至るまで作者の細かい配慮を感じる。例えば橋は、石橋、土橋、木橋、橋脚など微細に描き分ける。また車道や、「〇〇口」など主街道や道路の交差などへの配慮がみられる。主だった対象に付箋がつくが、その付箋内容を記したのが図1・2である。また、付箋を「寺社」「道・橋・出入口・渡し」「村・町」「川・河原」「地名・自然地形」「その他」の区分して記したのが【表1】である。付箋は全部で201カ所に貼られており、寺社が108、道・橋・出入口・渡しが15、村・町が44、川・河

【表1】種別ごとの付箋数

種別／箇所	右1	右2	右3	右4	右5	右6	右7	右8	右隻計	左1	左2	左3	左4	左5	左6	左7	左8	左隻計	合計
寺社	4	8	12	5	7	5	6	2	49	3	4	9	9	12	3	7	12	59	108
道・橋・出入口・渡し	1	1		1	2	2			7			1		1	4		2	8	15
村・町					3	3	5	4	15	3	2	2	4	3	6	5	4	29	44
川・河原		2			2	1	1		6			1		1				2	8
地名、自然地形		1		3	2	1	1	1	9	1	2	3	2	1	3	2	1	15	24
その他							1		1					1				1	2
計	5	12	12	9	16	12	14	7	87	7	8	16	15	19	16	14	19	114	201

原が8、地名・自然地形が24、その他が1である。

いまひとつの特徴は、非常に細かい豆粒のような書き方ではあるが人物を描いていることである。それも男女、身分、年齢、そして何をしているのか等がわかる程度に描き分けている。現在知られている「洛外図」は、京都国立博物館寄託中井家洛外図（江戸時代前期・「中井本」）、福田美術館蔵洛外図（江戸時代前期・「福田美本」）、神戸市立博物館所蔵洛外図（江戸時代前期・「神戸市博本」）、高槻市教育委員会蔵洛外図（江戸時代前期・「笹井家本」）、の4点である。これらすべてに人物は描かれない。またいずれも真上から見た配置で描こうとされており、ある意味地図的である。

その他、「京産大本」の特徴として、次の点を指摘しておく。

- ・ 植生を描き分けていること。
- ・ 土の色も意識的に描き分けているのではないと思われること。
- ・ 異なる時間を同一平面に記す、異時同図であること。

である。詳細は次節で述べるが、先に本品の描画内容について、ふたつの疑問点を示しておく。ひとつは右隻の第一扇が伏見稲荷からはじまっていることである。それも伏見稲荷大社の一部のみであり、五条大橋も西詰の部分は描かれていない。なにかしら切り取られたような、切り取ったような図柄である点と、何よりも伏見稲荷以南が描かれていない不自然さである。一方の左隻では、第一扇は菩提の滝や千束から、第八扇は現在の大阪府との府県境となる宝積寺や離宮八幡まで描かれていることと対照的である。ちなみに先述の先行する「洛外図屏風」の右隻第一扇はいずれも宇治である。宇治川の流れに沿って伏見港の賑わいなども描かれており、「京産大本」とはずいぶん異なる。

いまひとつは、桂離宮が描かれていないことである。付箋どころか建物の形跡すら描かれず、離宮があると思しき箇所には金銀砂子の雲に隠れる。修学院離宮については描かれてはいるが、付箋には単に「御茶屋」とされる。

(1)人物表現

洛中洛外図のなかでの「吉川本」の特異性については、早くに武田恒夫氏が指摘され、洛外図研究の百瀬ちどり氏や井戸美里氏、そして大塚活美氏の研究がある。(武田恒夫 1984、百瀬ちどり (注 38)、井戸美里 2020) それらによれば、鳥瞰図的な描写、洛中洛外図と洛外図の中間的な作品であることなど、興味深い特徴が指摘されている。

「吉川本」に描かれる人数であるが、大塚氏によれば右隻に約 300 名、左隻に約 200 名の人物が描かれるとしている。一方「京産大本」は、右隻 544 名、左隻 419 名、合計 963 名を描く。四条や三条を描いた右隻の第 3 扇、第 4 扇には特に多くの人物が描かれている。各隻、各扇の人数を示しておく。【表 2】

先述のように「京産大本」の人物表現は、男女、身分、年齢、何をしているのか等がわかる程度に描き分けている箇所と、数は少ないものの、単に点

【表2】各隻・扇別描写人数

[illegible]

で表現している場合もある。【図5】は右隻第8扇下部に描かれた上賀茂神社の一の鳥居前の情景であるが、神官姿の人物や旅姿の参詣者、賀茂川で釣りを楽しむ人など描かれる。【図6】は右隻第3扇下部に描かれた四条河原の情景であるが、お供を連れた芸子らしき女性、二本差し、また図の上方には、



図5 上賀茂神社鳥居前（右隻第8扇）



図6 四条河原（右隻第3扇）

扇子をかざして挨拶する男性であろうか、馴染みのおかみに偶然会ったところというような雰囲気描写がされている。ただいずれの表現も、目・鼻・口などの表情は描かれない。

「京産大本」の視点場は後述するように洛中の上空辺りであるので、両図とも各扇の下部であるということは、視点場に最も近いところである。近いところの人物を大きく描くということは、遠近法を採用していることになる。確かに、【図5】の旅姿の参詣者は大体実寸で1・2センチほどの背丈で描かれているが、各扇上部の方の人物はその半分ほどの大きさである。しかしそれだけではない。例えば【図7】は島原の情景であるが、大門前の客引きの女性たちや客と思しき男性と、楼閣内の人物の描き方は全く違う。楼閣内の人物、特に画面左側の楼閣内には、赤い点に近い表現で女性を、青い点に近いそれで男性を表現している。島原は左隻第7扇の下部にあり、視点場から近いところなのだが、屋内と屋外とで描き方は極端に分けられており、純然たる遠近法ではない。この点「吉川本」では、豆粒のようにして省略したような人物の描き方はされていないし、各扇の上部と下部の人物の大きさにさ



図7 島原(左隻第7扇)

ほどの差はない。

「京産大本」の人物表現は、もちろん戦国期から江戸初期にかけての洛中洛外図のような精密さはない。『都名所図会』などの名所を描いた刊本に描かれる人物表現に彩色された程度のものであるといえる。

(2)名所の表現 (左隻)

次に寺社の表現についてみていこう。「京産大本」で付箋の数が最も多いのが寺社である。寺社の描かれ方から景観年代を探る手掛かりを見つけるとともに、本品の作成に参考としたことが想像に難くない『都名所図会』(安永9年(1780))、『拾遺都名所図会』(天明7年(1787))の画角や描写内容と比較するところからはじめたい。では左隻から逐一みていこう。

・高山寺【図8】：画角は『都名所図会』【図9】と同じ。建造物の配置や内容も近似するが、禅堂院下の建造物は『都名所図会』には描かれない。清滝川に架かる橋は双方とも刎橋である。紅葉に彩られた秋の情景。南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・西明寺【図10】：画角は『都名所図会』【図11】と同じ。建造物の配置や内容も近似するが、清滝川に架かる橋の向きは違う。紅葉に彩られた秋の情景。



図8 高山寺 (左隻第1扇)

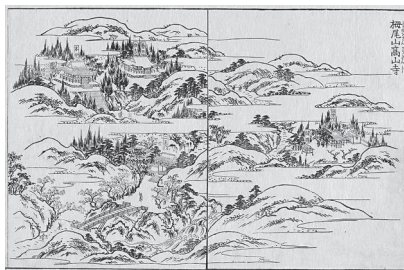


図9 高山寺 『都名所図会』

南南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・鷹峯【図12】：画角は『都名所図会』【図13】と同じ。源光庵の建物の配置や描き方はほぼ同じ。鷹峯の集落内に見える瓦屋根は光悦寺であろう。鷹峯の街道沿いの家の中には材木商と思しき民家がみられる。鷹峯は北山杉の材木卸商が集住したところである。そうした家並みは『都名所図会』には描かれない。南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・今宮社【図14】：『都名所図会』【図15】と画角はほぼ90度ずれる。建造物



図10 西明寺(左隻第1扇)

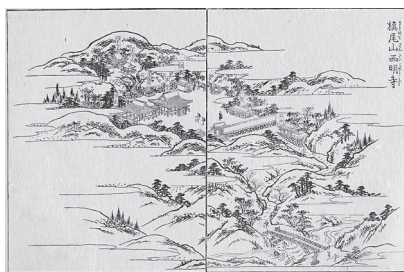


図11 西明寺『都名所図会』



図12 鷹峯(左隻第1扇)



図13 鷹峯 『都名所図会』



図15 今宮神社 『都名所図会』



図14 今宮社 (左隻第1扇)

の配置や内容も近似するが、『都名所図会』には絵馬舎は描かれない。同社の絵馬舎は寛政11年(1799)か同12年に建立されたことがわかっており(認定NPO法人古材文化の会2019:59)⁽³⁾、『都名所図会』に描かれていないのは当然である。絵馬舎の右に描かれるのは若宮社の拝殿であろうか。『都名所図会』とは位置がずれているが、それは紙面の関係であろう。「京産大本」では、南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・愛宕山【図16】：愛宕山頂の白雲寺の描写については『都名所図会』【図17】と画角はずれる。一の鳥居から清滝川にかかる渡猿橋の描写はほぼ同一。また『都名所図会』の月輪寺の挿図【図18】とはほぼ同一の画角での描写で

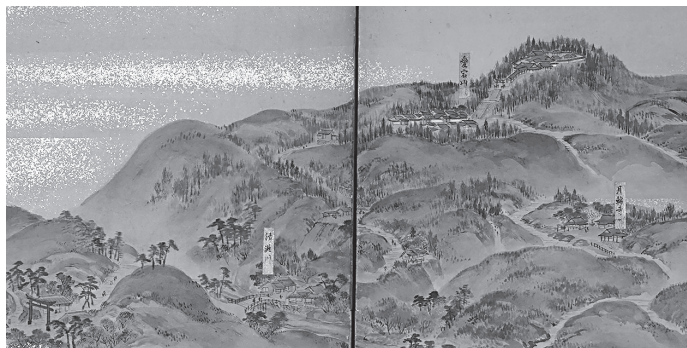


図16 愛宕山 (左隻第2扇)

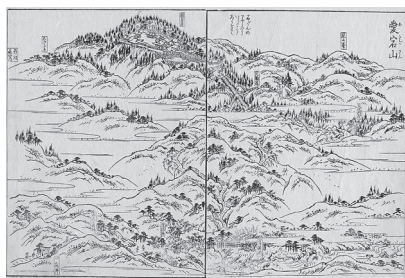


図17 愛宕山 『都名所図会』

ある。「京産大本」では黒門を入ってからの寺坊や宿屋の家並みが描かれている。愛宕山、月輪寺とも南東方向からの俯瞰した配置で描写している。



図18 月輪寺 『都名所図会』

・神護寺【図19】『都名所図会』【図20】と画角はほぼ90度ずれる。『都名所図会』には地藏院のかわらけ投げの情景はないが、「京産大本」にはそれらしき人影が描かれる。紅葉に彩られた秋の情景。清滝川に架かる橋は双方とも刎橋である。南東方向からの俯瞰した配置で描写している。



図19 神護寺（左隻第2扇）

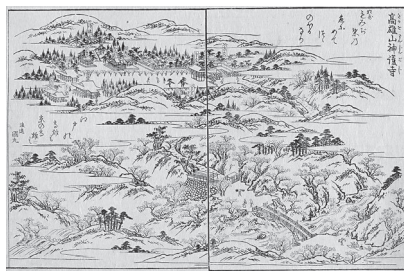


図20 神護寺 『都名所図会』

・金閣寺【図21】：『都名所図会』【図22】と画角はほぼ同じであるが、庫裏、方丈、総門の位置関係は「京産大本」とは異なる。一部赤味を帯びた植生が描かれるので、秋の情景か。左大文字が描かれる。北東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・大徳寺【図23】：大徳寺には付箋が貼られていないが、貼る箇所が第2扇の下方に指示されており、貼り忘れか後ではがれたのであろう。『都名所図会』【図24】と画角はほぼ同じであるが、『都名所図会』が法堂、仏殿、山門を中心にその周囲のみを描くのに対して、「京産大本」は塔頭をふくめた境内全体



図 21 金閣寺 (左隻第 2 扇)

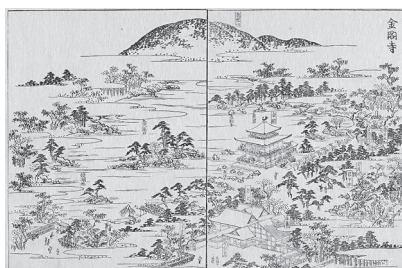


図 22 金閣寺 『都名所図会』

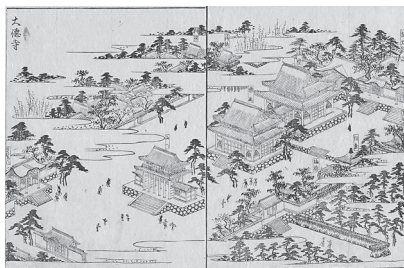


図 24 大徳寺 『都名所図会』

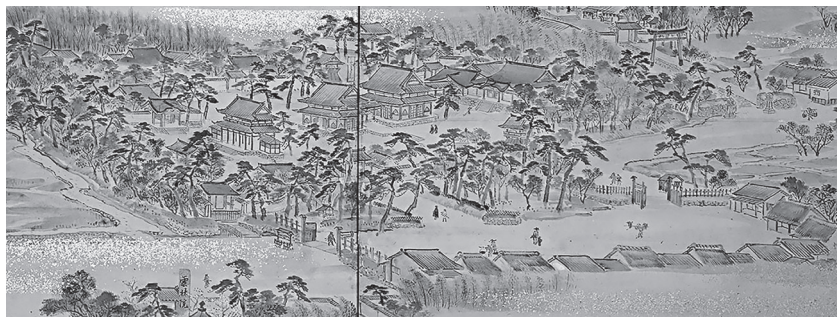


図 23 大徳寺 (左隻第 2 扇)

を描いている。境内の東側には広い空閑地が記され、その南北の出入り口には木戸が設けられ、南側には高札場のような描写がある。天保2年(1831)に刊行された京都の絵図「改正京町繪圖細見大成」⁽⁴⁾には北側の木戸口の表記がある。南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・往生院・祇王寺【図25】：『都名所図会』【図26】と画角及び描写内容もほぼ同じである。「京産大本」は左手の建物に「祇王寺」と付箋が貼られているが、祇王寺は往生院の別称であるので、これは誤りである。正確には往生院の子院である「瀧口寺」あるいは「三宝院」であろう。南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・大覚寺【図27】：『都名所図会』の挿図は大澤池の一部を描くだけで比較にならないので、ここには『拾遺都名所図会』【図28】をあげる。境内の様子は『拾遺都名所図会』に詳しいが、「京産大本」は大澤池を含めて俯瞰的に描かれている。南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・妙光寺・仁和寺・龍安寺・五智山【図29】：妙光寺は『都名所図会』【図30】と画角は異なるが、描写内容はほぼ同じである。『都名所図会』の仁和寺の描写は、金堂や五重塔を描く挿図【図31】と山門と参道を描く挿図【図32】に分かれるが、双方とも画角は異なる。双方とも境内いっぱいに満開の桜の植栽を描いている。「京産大本」は傾斜地に建つ仁和寺境内外の様子を細



図25 往生院(左隻第3刷)

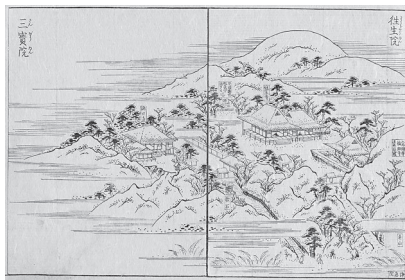


図26 往生院『都名所図会』



図 27 大覚寺 (左隻第3扇)

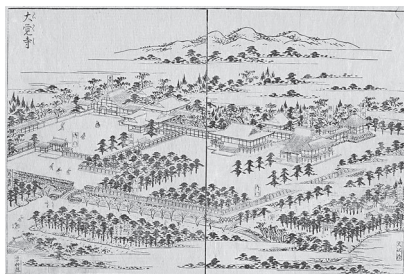


図 28 大覚寺 『拾遺都名所図会』



図 29 妙光寺・仁和寺・龍安寺・五智山 (左隻第3扇)



図 30 妙光寺 『都名所図会』

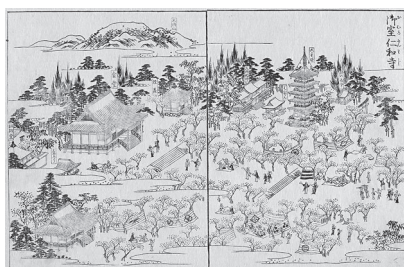


図 31 仁和寺 『都名所図会』

かに描写する。特に北側の丘陵地に散在する小堂までを描く。これらの小堂は、御室八十八ヶ所霊場であろう。同霊場は文政10年(1827)に、仁和寺29世門跡済仁法親王の本願により始まったと伝えられる。龍安寺は『都名所図会』【図33】と画角は異なり、描写内容にも違いがある。龍安寺は、寛政9年(1797)の火災によって方丈、仏殿、庫裏を焼失しており、その後、方丈と庫裏は塔頭の西源院のものが移築された。(仏殿が再建されたのは昭和56年(1981)) 妙光寺・仁和寺・龍安寺・五智山とも、南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・等持院【図34】：『都名所図会』【図35】と画角及び描写内容もほぼ同じである。『都名所図会』は本堂と中門を中心に描かれるが、「京産大本」は広く

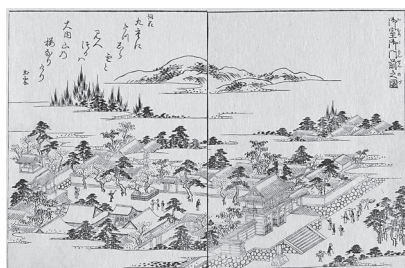


図32 御室門前 『都名所図会』

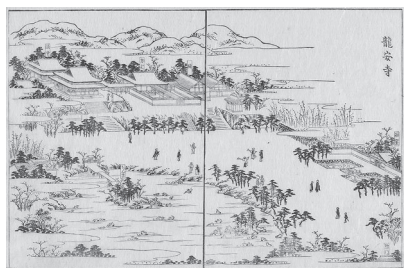


図33 龍安寺 『都名所図会』



図34 等持院 (左隻第3扇)

桜の満開の様子を描く。鳥居外に二階建ての建物が二棟あるが料理屋であろう⁽⁵⁾か。紙屋川に架かる橋も擬宝珠付きの木橋である。北東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・七野社【図 38】：『都名所図会』【図 39】と画角は異なるが、描写内容はほぼ同じ。石垣を高く積んだプラットフォームに社殿が立てられる情景も同様である。南東方向からの俯瞰した配置で描写している。

・二尊院・清涼寺【図 40】：二尊院は『都名所図会』【図 41】と画角は異なる。主たる建物の描写内容はほぼ同じであるが、『都名所図会』の方が詳細である。清涼寺も『都名所図会』【図 42】と画角は異なるが、主たる建物の描写内容はほぼ同じである。二尊院は北東方向から、清涼寺は南東方向から俯瞰した配置で描写している。

・常寂光寺・野々宮・天龍寺【図 43】：常寂光寺は『都名所図会』【図 44】と画角は異なるが、建物の描写内容は同じであり、特徴ある茅葺の仁王門も詳細に描かれる。野々宮は『都名所図会』【図 45】と画角、建物の描写内容とも同一である。天龍寺は、『都名所図会』【図 46】と画角は同じで、建物の描



図 38 七野社 (左隻第 3 扇)



図 39 七野社 『都名所図会』

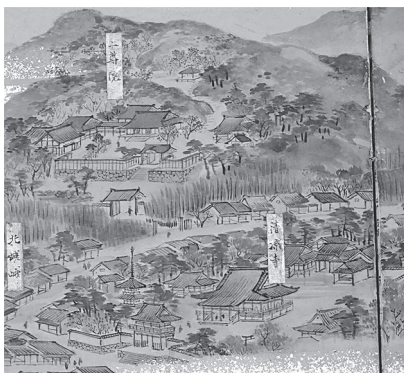


図40 二尊院・清涼寺(左隻第4扇)

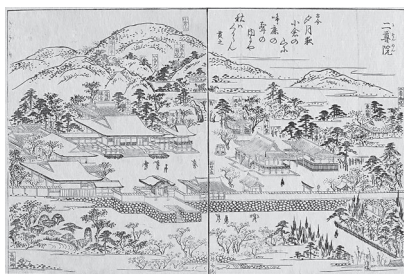


図41 二尊院『都名所図会』



図42 清涼寺『都名所図会』

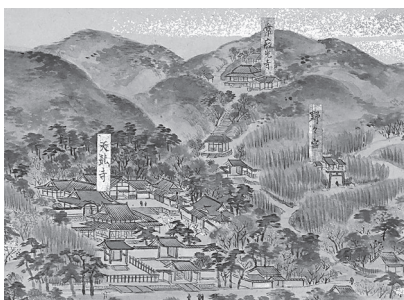


図43 常寂光寺・野々宮・天龍寺(左隻第4扇)



図44 常寂光寺『都名所図会』

写内容はほぼ同じであるが、仏殿北側（画面右側）の建物構成に若干の差がみられる。天龍寺は度重なり火災に遭った。常寂光寺は北東方向から、天龍寺は南東方向から俯瞰した配置で描写している。

・妙心寺【図 47】：『都名所図会』【図 48】と画角は異なる。『都名所図会』には山門、法堂、仏殿、方丈を中心とした本山の中核のみしか描かれていないが、「京産大本」には、安政 6 年（1859）段階で塔頭数 80 を数え山内に在家も数多く抱えた景観をよく示している。「京産大本」の作成年代よりも下がると推測される地図「正法山妙心禅寺塔頭総図」（安政 6⁽⁶⁾年）には、一条通が寺域の東を流れる宇多川に架かる橋や、馬つなぎ場、南側の下立売（通）街道の総門や石橋、南門前の制札などが記号的に記されるが、「京産大本」ではそれらを絵画的に表現されており面白い。北東方向から俯瞰した配置で描写している。

・北野天満宮・東向観音寺・経堂【図 49】【図 170】：『都名所図会』【図 50】と画角は異なるものの、境内の建造物はほぼ同一の形態で描かれている。東向観音と経堂の画角は北東方向からであるが、北野天満宮は南東方向から描く。この画角のずれは、御土居の藪の切り崩し箇所が連続して南に続き、そ



図 45 野々宮 『都名所図会』

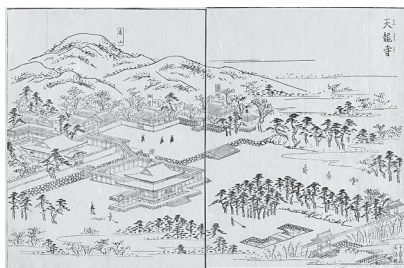


図 46 天龍寺 『都名所図会』



図 47 妙心寺 (左隻第 4 扇)

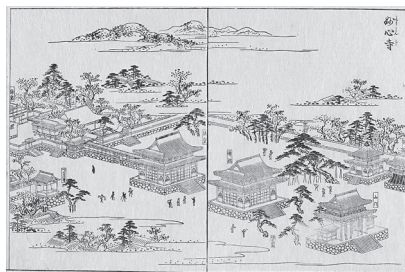


図 48 妙心寺 『都名所図会』

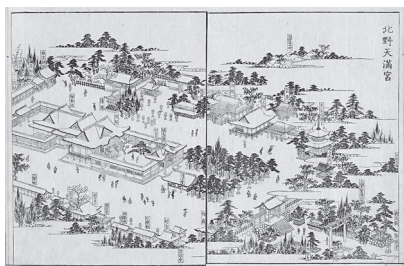


図 50 北野天満宮 『都名所図会』



図 49 北野天満宮・東向観音寺 (左隻第 4 扇)

こを右京へ道が続いているために、画面上の破綻を回避するための描写であると思われる。経堂は願成就寺のことであるが、この当時も経堂というのが一般的な名称であった。願成就寺は明治の初めに廃寺となる。

・松尾社・月読社【図 51】：松尾社は『都名所図会』【図 53】と画角、描写内容ともほぼ同じである。松尾大社の楼門に取り付く壁は、ぐるりと松尾社の前面を囲んでいる。「京産大本」ではこの壁は上から胡粉を重ねて白さを強調している。図様としては『都名所図会』に描かれたものと同じようにみえるが、文政 8 年（1825）12 月に大覚寺から壁が寄進された記録が「松尾大社文書」にあることから、本品に描かれた壁は寄進後間もない頃の新壁の可能性はある。それゆえわざわざ胡粉で補彩されたのかもしれない⁽⁷⁾。月読社は『都名所図会』【図 52】と画角は異なる。描写内「京産大本」の方は境線を省略して描いている。松尾社、月読社とも北東方向から俯瞰した配置で描写している。

・梅ノ宮・長福寺【図 54】：梅宮社は『都名所図会』【図 55】とは画角は異なる長福寺は『拾遺都名所図会』【図 56】とは画角、描写内容とも異なる。「京

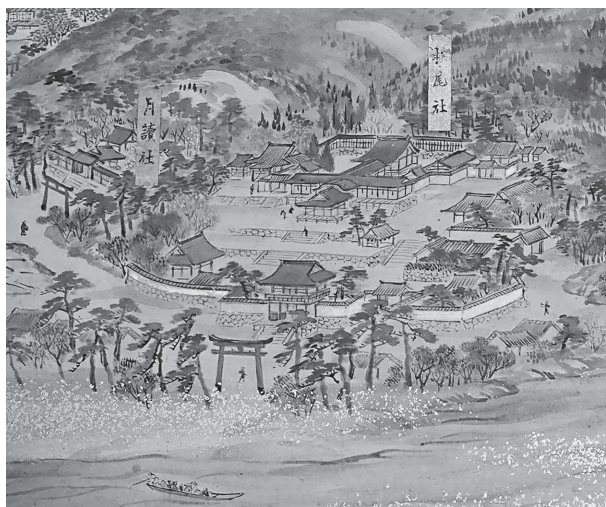


図 51 松尾社・月読社（左隻第 5 扇）



図 52 月読社 『都名所図会』

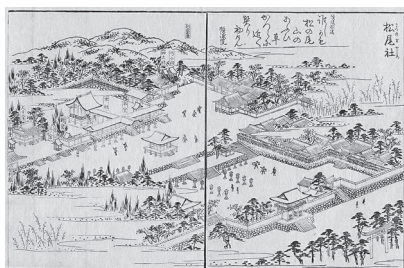


図 53 松尾社 『都名所図会』



図 54 梅宮・長福寺 (左隻第5扇)

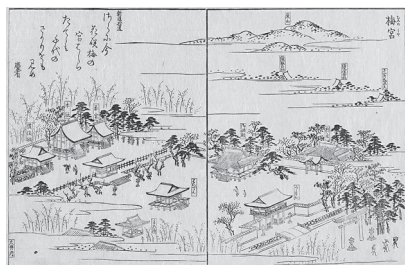


図 55 梅宮 『都名所図会』

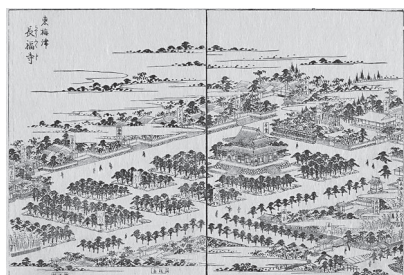


図 56 長福寺 『拾遺都名所図会』

産大本」には母屋の周りに裳階をつけた堂々たる仏殿を特徴的に描くだけで、『拾遺都名所図会』に描かれるような松林の庭はない。梅宮社、長福寺とも北東方向から俯瞰した配置で描写している。

・車折社【図 57】：『拾遺都名所図会』【図 58】と画角は同じであるが、内容は異なり、「京産大本」の方はほとんど省略されて描かれる。双方とも下嵯峨の材木商が描かれるが、「京産大本」では西高瀬川沿いに数多くの材木商が軒を連ねている様子が描かれる。画面中央（第4扇）の屋敷は角倉屋敷、その右の門は臨川寺の門である。⁽⁸⁾

・太秦・木蔭社【図 59】：太秦広隆寺は『都名所図会』【図 60】と画角は違う

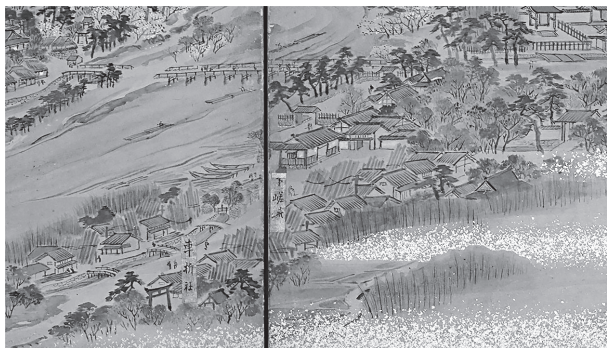


図 57 車折神社（左隻第5扇）

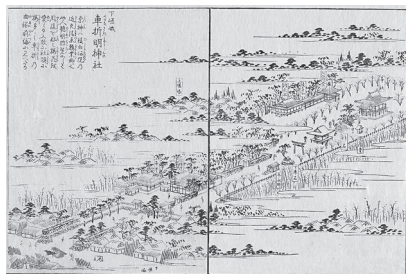


図 58 車折神社 『拾遺都名所図会』

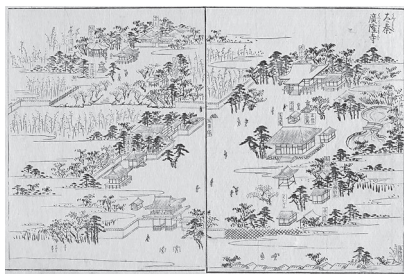


図 60 太秦 『都名所図会』

が、境内の建造物の配置や形式は内容的にはかなり近い。「京産大本」の境内は、桜満開の春景色である。双方とも広隆寺の境内西北部に建てられた八角形の桂宮院本堂も描かれるが、その南側の門までは『都名所図会』には描かれていない。また「京産大本」(画面右上)に広隆寺の西門外に簡易な屋形と石仏が並んでいるような情景が描かれるが、これは京都の古井戸のひとつ「いさら井」であろうか。木寫社、蚕ノ社は『都名所図会』【図 61】と画角はほぼ同じ、内容的にもかなり類似している。「京産大本」には『都名所図会』に描かれている境内の小祀は省略されているが、それは画面スペースの関係か。有名な三本足の鳥居は、双方に象徴的に記される。【図 59】の鳥居脇の民家は茶店であろうか。また広隆寺と木寫神社の実際の位置関係は東西にほぼ直線に走る道(太子通)沿いにあるが、「京産大本」では折れ曲がった街道沿いに配置されているのも、画面構成上の理由によるだろう。その屈曲点に瓦葺のお堂がみえるが、地藏堂か。太秦広隆寺は北東から、木寫社は南東から俯瞰した配置で描写している。

・大原野春日・花ノ寺【図 62】：大原野神社は『都名所図会』【図 63】と画角は違うが、境内の建造物の配置や形式は内容的にはかなり近い。総持寺の通



図 59 太秦・木寫社(左隻第5扇)

称である花ノ寺も『都名所図会』【図64】と画角は違うものの、境内の建造物の配置や形式は内容的にはかなり近い。境内の西行桜をはじめ、桜の描写が目立つ。また双方ともに応仁の乱以前の建造物である茅葺の仁王門が描かれる。(現在は瓦葺き) 大原野神社、総持寺とも南東から俯瞰した配置で描写



図61 木鳥社 『都名所図会』



図63 大原野春日 『都名所図会』



図62 大原野春日・花ノ寺 (左隻第6・7扇)

している。

・三鈷寺・善峯寺・小塩山【図65】：三鈷寺は『都名所図会』【図66】と画角、内容とも同じ。ただ「京産大本」には仁王門が描かれない。善峯寺は山中に広がる寺院であるが、『都名所図会』【図67】と画角、それぞれの建物も描写もほぼ同じである。国の天然記念物の遊竜松も描かれる。唯一「京産大本」には善峯寺から三鈷寺に至る小道に門が描かれる。現在の北門であろうか。また善峯寺に至る山道は溪谷に沿って通うが、「京産大本」にはその様子も描かれる。小塩山十輪寺も『都名所図会』【図68】と画角、内容とも類似する。双方とも珍しい鳳輦型の屋根型本堂を描く。三鈷寺、善峯寺、小塩山十輪寺とも南東から俯瞰した配置で描写している。

・光明寺【図69】：『都名所図会』【図70】と画角、内容とも同じ。御影堂から下段の釈迦堂へとつながる回廊や境内の建造物など詳細に一致する。総門外には「浄土門根元地」

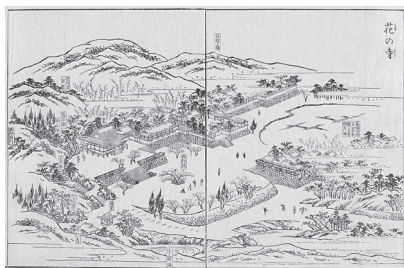


図64 花ノ寺 『都名所図会』



図65 三鈷寺・善峯寺・小塩山(左隻第7扇)



図66 三鈷寺 『都名所図会』

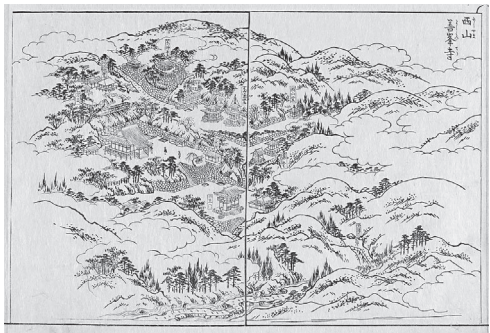


图 67 善峯寺『都名所図会』



图 68 小塩山『都名所図会』



图 69 光明寺 (左隻第 7 扇)

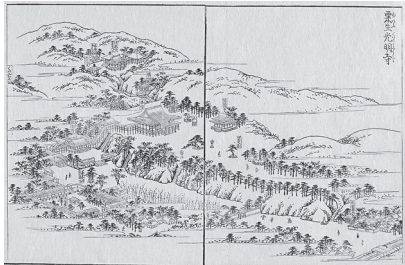


图 70 光明寺『都名所図会』



图 72 久遠寺 (『都名所図会』)



図 71 久遠寺 (左隻第 7 扇)

の石標が双方ともに描かれる。東南東から俯瞰した配置で描写している。

・久遠寺【図 71】：『都名所図会』【図 72】のものとは画角が違うが、境内の建造物の配置や形式はほぼ同じ。現在本願寺西山別院と称される久遠寺であるが、特徴ある本堂は、かつての本願寺の仮本堂であった阿弥陀堂（元和 4 年（1618）建立）を移築したものであり、地柱を廂下にまわした特徴的な様式は、双方ともきちんと描かれている。また双方ともに門前の民家と集落（川島村）は丁寧に描かれており、「京産大本」には、桂の渡しから樫原を抜けて丹波に至る街道沿いの往来の姿、『都名所図会』には門前で脱穀する風景などが描かれる。門前での農作業などは、寺との結びつきが強かったかつての河島寺内からのつながりをイメージさせる。双方ともに桂の地藏堂、六地藏のひとつ桂地藏を描く。（【図 71】の右下）北東方向から俯瞰した配置で描写している。

・島原【図 73】：『都名所図会』【図 74】と画角は同じ。『都名所図会』は大門周辺のみの描写であるが、「京産大本」は享保 17 年（1732）に設置された西門や、その北側に住吉神社の御旅所が描かれる。（【図 73】画面右角の社殿の屋根のような描写の建物）⁽⁹⁾ 島原の描写は興味深い。ひとつは廓を囲む壁とそ

の外側に溝のような狭い堀が描かれている点である。『都名所図会』にも同様に溝のような堀が描かれる。島原の堀は当初は幅一軒半であったらしいが、江戸期を通して埋め立てが進んだという。(明田鉄男 1990:53) 天保 13 年(1842) 8 月、天保の改革の断行により、島原以外の遊所(祇園町・祇園新地、二条新地、北野、七条新地)の「遊女渡世」が禁止され、遊女屋は商売替えか、島原への移転かを迫られる事態となったが、島原では空き地に 323 軒の「建家」をおこない彼らの受け入れを行った。(下坂守 2021: 538、574) この受け入れの際に、土地の確保の理由から周囲の堀を完全に埋めたとされることから、まだ堀が描かれる本図の景観はその前ということになる。

「京産大本」には、東門(島原大門)の前に芝居小屋のやぐらと思しき建物が描かれる。2 本の梵天が立ち、櫓の陰になってよく見えないが、まねきのような板が 2 本かかっているのもみえる。⁽¹⁰⁾ また大門は慶応 3 年(1867)に建立された現在のものと異なり、屋根は描かれていない。寛政 11 年(1799)年に刊行された『都林泉名勝図会』【図 75】に描かれる門は、島原廓内を通る

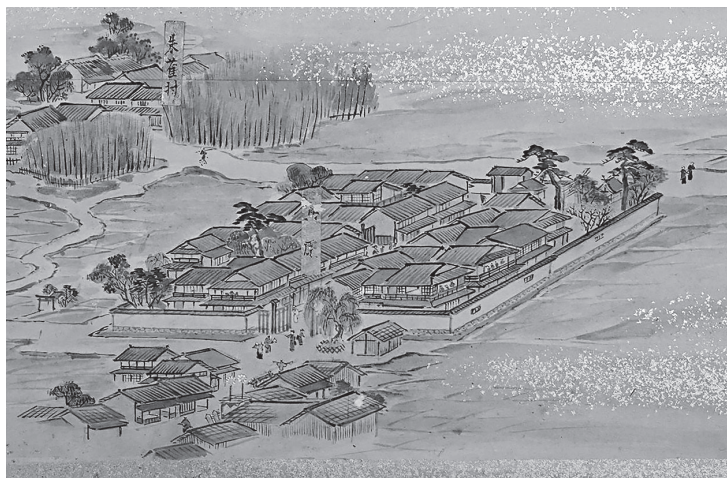


図 73 島原(左隻第 7 扇)

通りである「道中筋」に入り込む出入口にしつらえられたものである⁽¹¹⁾。島原は、北東方向から俯瞰した配置で描写している。

・奥海印寺・柳谷観音【図76】：奥海印寺の寂照院は『都名所図会』【図77】と画角も内容も同じ。また柳谷観音は『都名所図会』には寂照院の左上に並ぶように描かれており、「京産大本」も同様に描かれ、画角、内容とも同一であるものの、「京産大本」の「柳谷観音」の付箋はさらに左手の方に描かれた伽藍に付されている。この伽藍描写は『拾遺都名所図会』【図78】の柳谷観



図74 島原 『都名所図会』



図75 島原 (『都林泉名勝図会』)



図76 奥海印寺・柳谷観音 (左隻第8扇)

音と画角・内容とも同一であるので、これらの一連の比較から「京産大本」の作者は、この部分に関しては『都名所図会』と『拾遺都名所図会』の双方を参照にして描いていることが明らかである。確かに寂照院と柳谷観音の実際の距離感は『都名所図会』のように隣接するものではないので、少し離して『拾遺都名所図会』を参照に柳谷観音を描いたのだろう。よって「京産大本」の作者は、柳谷観音を二つ描くというミスを犯した。奥海印寺は南東方向から、柳谷観音は北東方向から俯瞰した配置で描写している。

・長岡天神・向日明神【図79】：長岡天神は『都名所図会』【図80】と画角は



図77 奥海印寺 『都名所図会』(1)

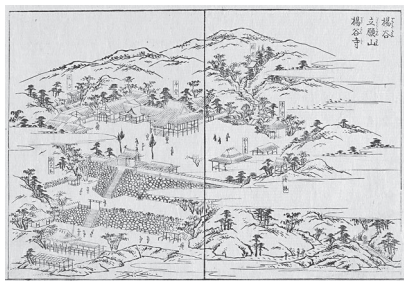


図78 柳谷観音『拾遺都名所図会』



図79 長岡天神・向日明神 (左隻第8扇)

同じで、建物の配置等は類似するといえども、「京産大本」は詳細さに欠ける。境内の八条ヶ池の汀は紅葉に彩られた秋の情景である。向日明神は『都名所図会』【図 81】とは画角が違うが、本殿のみ同じ画角となっている。【図 81】では西国街道から入る参道に対して横向きに本殿が建てられているのだが、「京産大本」では参道に正対している。向日神社の本殿は南向きであったが、天保 2 年（1831）にはじまる大改修によって東向きに引き直され、天保 13 年（1842）までには完成している。（向日神社崇敬会・向日神社 2018：170）すなわち、『都名所図会』が記された安永 9 年（1780）段階では本殿は南向きであった。また「京産大本」の参道は桜並木となっているが、『都名所図会』の方には桜並木はない。文政年間（1818～30）に向日神社の宮司であった六人部是香が、計画的に参道の両側に桜を植樹して整備したことがわかっており（向日神社崇敬会・向日神社 2018：127）、「京産大本」はそうした状況を忠実に捉えている。長岡天神、向日神社とも北東方向から俯瞰した配置で描写している。

・蔵王堂【図 82】：『都名所図会』【図 83】と画角、描かれる建物も同じ。蔵王堂の南に位置する綾戸神社の表現などは全く同じと言ってよく、この場面は『都名所図会』を参照して描いた可能性が高い。ただ久世橋の表現は異なり、「京産大本」には欄干がある。蔵王堂は南東方向から俯瞰した配置で描写している。

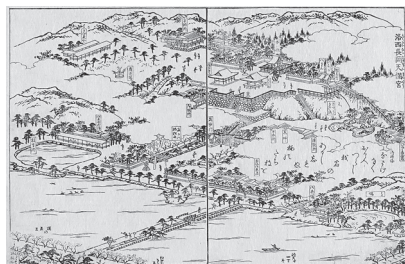


図 80 長岡天神 『都名所図会』

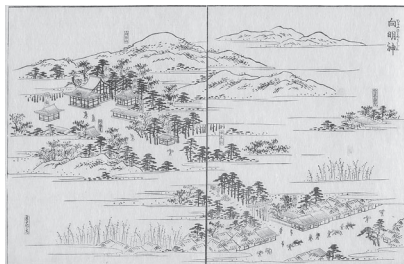


図 81 向日明神 『都名所図会』

・吉祥院【図84】：『都名所図会』【図85】と画角はほぼ同じ、描かれる建物も若干の相違はあるがほぼ同じである。集落前の西高瀬川にかかる橋も描かれる。南東方向から俯瞰した配置で描写している。

・遍照心院【図86】：『都名所図会』【図87】と画角は同じく、描かれる建物も『都名所図会』の方が詳しいが、主たるものは同様に描かれる。ただ「京産大本」には遍照心院大通寺の仏殿は藪の中に隠れ、本地堂だけ描かれて上に「遍照心院」の付箋が貼付されている。遍照心院大通寺は鉄道敷設のため明治末年に移転し、現在は東寺の南側に所在するが、現在地に残る六孫王神社は大通寺の鎮守である。寺域の向かい側の民家は西八条村であろう。集落の出入り口に木戸が描かれる。

・東寺【図88】：『都名所図会』【図89】と画角は異なり、南向きの東寺の伽



図82 蔵王堂（左隻第8扇）

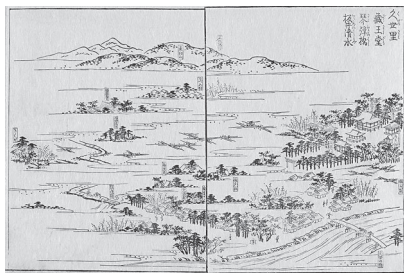


図83 蔵王堂 『都名所図会』



図84 吉祥院（左隻第8扇）

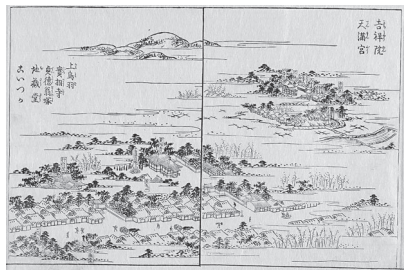


図85 吉祥院 『都名所図会』

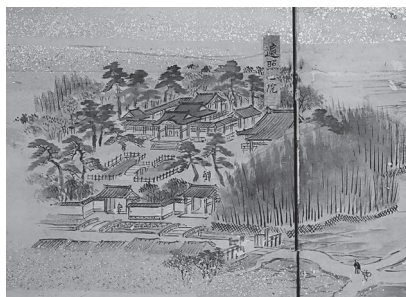


図 86 遍照心院 (左隻第 8 扇)

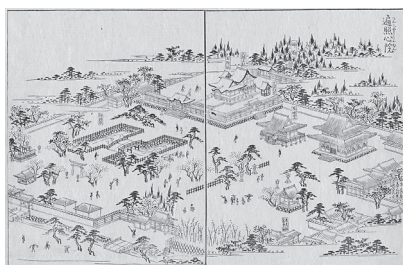


図 87 遍照心院 『都名所図会』



図 88 東寺 (左隻第 8 扇)



図 89 東寺 『都名所図会』

藍を北東側上空から俯瞰した構図である。描かれる建物は『都名所図会』の方が詳しいが、「京産大本」も主たる建物は捉えて配置している。東寺の門前には荷車が描かれ、門前から四塚を南に折れ、千本通りまで轍が描かれるが、これは車道を描いている。千本通りはかつての朱雀大路で、平安京の南端である九条からは、鳥羽作道となって淀まで通う京都の表玄関のひとつであり、四塚はまさにそこに位置した。「京産大本」には「四ツ塚」の付箋のところに燈籠のような施設がみられるが、愛宕燈籠か。またその後方にあるのは四塚橋か。

(3)名所の表現（右隻）

次に右隻の名所表現についてみていく。

・稲荷村【図90】：付箋には「稲荷村」とあるが、民家の描写はないので、稲荷社の間違いであろう。『都名所図会』【図91】と画角は異なるが、主な建造物はほぼ一致する。「京産大本」には千本鳥居に発展するような小鳥居の列



図90 稲荷村（右隻第1扇）

がみられるが、『都名所図会』にはない。千本鳥居がいつ発生するのかについては明確にはし得ないが、天保12年(1841)1月から2月に伊勢参宮を兼ねて京都を旅した上野家の名主であった田中佐太郎が、その手記である「伊勢参宮日記」の伏見稻荷のところに「道筋鳥居式百廿五本」と記しており、この頃には多くの鳥居の奉納がはじまっていたことがわかる。⁽¹²⁾田中佐太郎は建造物に強い興味を示しており、立ち寄った寺社の建物の屋根や向きなども克明に記している。元治元年(1864)年に刊行された『花洛名勝図会』【図92】には千本鳥居が描かれており(画面左上方)、19世紀の前半頃には鳥居奉納の習俗がはじまったとしてよいだろう。「京産大本」はそうした動きも画面に捉えているのである。

特筆すべきは楼門と本殿の間に位置する外拝殿の向きである。「京産大本」は『都名所図会』同様に妻入りであるが、『花洛名勝図会』では向きが90度違い平入となっている。外拝殿は天保11年(1840)に再建されており、その前身の拝殿は妻入りの方形平面のものであった。(伏見稻荷大社御遷座千三百年史調査執筆委員会2011:444)となれば「京産大本」の製作下限を、天保11年頃に比定できる根拠のひとつにすることが可能である。稻荷社の大鳥居が半分しか描かれず、まるで断ち切られたような格好になっているのは何かしら不自然である。稻荷社は北西方向から俯瞰した配置で描写している。

・東福寺【図93】:『都名所図会』【図94】と画角はほぼ一緒であるが、『都名



図91 稲荷社『都名所図会』

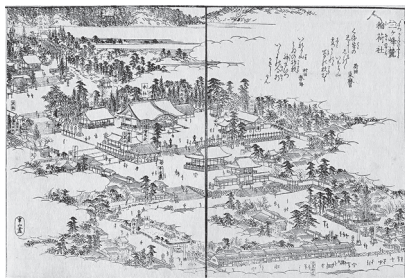


図92 稲荷社『花洛名勝図会』

所図会』の方は全く伽藍を描いていないが「京産大本」は主要な伽藍を配置し、通天橋の周りは紅葉で彩られる。画面左手に開山堂を、その特徴的な楼阁建築である伝衣閣と思しき建物とともに描く。開山堂は文政2年(1819)に焼失したが、文政6年(1823)に再建される。画面下に本町通り(伏見街道)が通るが、一ノ橋横に鳥居が描かれている。位置的にも滝尾神社であろうが、大丸百貨店の創業家である下村家の支援を受けた滝尾神社は、天保7年(1836)に貴船神社の奥社殿を移し、天保10年(1839)から翌11年にかけて整備されたとされる。(大丸二百五十年史編集委員会 1967:89) 本図では本殿は松



図 93 東福寺(右隻第1扇)

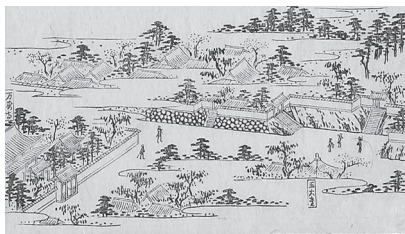


図 94 東福寺『都名所図会』

の木の後ろに隠れており屋根型も定かではなく、移築された社殿であるかどうかは判断できないので、滝尾神社を描いている点のみ指摘しておく。東福寺は、北西方向から俯瞰した配置で描写している。

・三十三間堂・大佛殿・日吉社【図95】：三十三間堂は『都名所図会』【図96】と画角は同じ、境内の建造物の配置や形式もほぼ同じである。方広寺大仏も『都名所図会』【図97】と画角・内容とも同様である。方広寺大仏殿は寛政10年(1798)に全焼しており、「京産大本」が作成されたと推定する19世紀前半には存在していなかったで、ここは『都名所図会』を完全に写し取ったとしてよいだろう。方広寺大仏殿は京都を描く際のメルクマークとしての役割があり、例えば幕末に刊行された『花洛名勝図会』にも大仏殿の挿図があり、そこに「寛政中回祿の後、唯礎石のみ存るといへども、帝畿第一の壮



図95 三十三間堂・大佛殿(右隻第1・2扇)

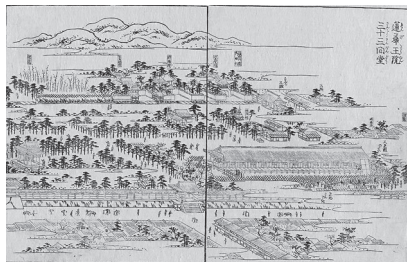


図96 三十三間堂 『都名所図会』

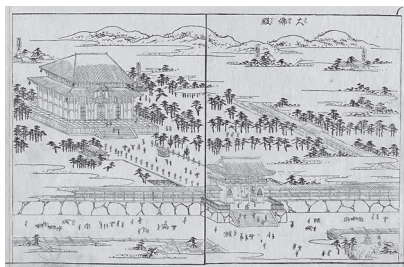


図97 方広寺 『都名所図会』

観の廢れたるを慨歎に堪ず、故に旧図の俣を挙るなり」と記される。日吉社とあるのは新日吉神社のことである。三十三間堂、大佛殿、日吉社とも北西方向から俯瞰した配置で描写している。

・泉涌寺・今熊観音【図98】：泉涌寺は『都名所図会』【図99】と画角は異なるが、描かれる建物はほぼ同一である。「京産大本」の泉涌寺は、北西方角から俯瞰した配置で描かれる。今熊観音は【図99】と画角、内容とも同一である。また馬つなぎのある泉涌寺総門は、『都名所図会』【図100】に描かれるものと同一である。泉涌寺は西から。今熊観音は南西方角から俯瞰した配置で描かれる。



図98 泉涌寺・今熊観音（右隻第1・2扇）

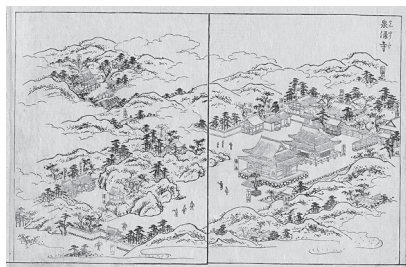


図99 泉涌寺『都名所図会』



図100 今熊野『都名所図会』

・清閑寺【図 101】：『都名所図会』【図 102】と画角、境内の建造物の配置や形式、境内に至る道も同じ描写である。南西方角から俯瞰した配置で描かれる。

・西大谷・小松谷【図 103】：西大谷は『都名所図会』【図 104】と画角はほぼ同じ、境内の建造物の配置や形式、境内に至る道も同じ描写である。参道にかかる石製の円通橋、通称めがね橋はまだなく、木製の橋が描かれる。石製



図 101 清閑寺 (右隻第 2 扇)



図 102 清閑寺 『都名所図会』



図 103 西大谷・小松谷 (右隻第 2 扇)

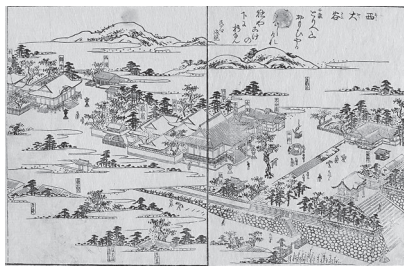


図 104 西大谷 『都名所図会』

のめがね橋が架けられるのは安政3年(1856)のことである。小松谷は浄土宗の清涼山光明真言院のことで、通称小松谷正林寺という。享保年間に北野真盛辻子(現上京区)から渋谷街道沿いの当地に移転した。『都名所図会』【図105】と画角、境内の建造物の配置や形式も同じである。小町寺は『都名所図会』には挿図はない。小町寺は明治初年に廃寺になり、仏像などは東福寺の退耕庵に移されている。西大谷は北北西方角から俯瞰した配置で描かれる。

・六波羅蜜寺【図106】:『都名所図会』【図107】と画角は逆で、「京産大本」

は寺域の北西上空から俯瞰するように描かれる。境内の建造物の配置や形式はほぼ同じようにみえる。

・清水寺・霊山【図108】:清水寺は『都名所図会』【図109】とも画角は同じで南西方向から俯瞰した構図で、境内の建造物の配置や形式、境内に至る道も同じ描写である。清水寺と後方の地主神社は、桜が満開の春景色である。子安塔はこの時期仁王門の下に位置していた。(明治44年(1911)に現在地に移転)産寧(三年)坂は子安塔(泰



図105 正林寺『都名所図会』



図106 六波羅蜜寺(右隻第2扇)

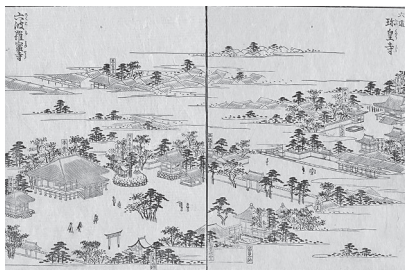


図107 六波羅蜜寺『都名所図会』

産寺)への参詣道であったという説があるが、この坂で転ぶと三年以内に死ぬという江戸時代からの言説も、産婦への戒めとして聞けば肯ける。産寧坂から霊山に行く道沿いであろうか、高楼の建物が描かれ、中に赤い着物を着た人物が描かれるので、なにがしかの遊興施設であろうが何かは不明である。霊山正法寺は『都名所図会』【図110】とも画角は同じで、境内の建造物の配置や形式、境内に至る道も同じ描写である。清水寺、霊山正法寺ともに西南西方向からの俯瞰である。



図108 清水寺・霊山(右隻第3扇)

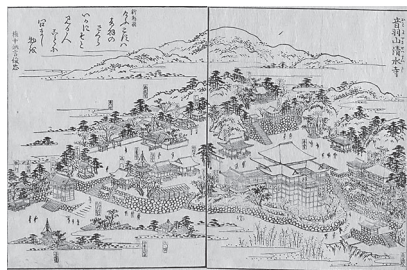


図109 清水寺 『都名所図会』



図110 霊山 『都名所図会』

・東大谷・高台寺・雙林寺【図111】：東大谷は『都名所図会』【図112】と画角を変えるが、親鸞上人御廟の向きは同じ。「京産大本」は東大谷を北西方向から俯瞰している。境内の建造物の配置や形式はほぼ同じ。大谷参道が整備されるのは文久2年（1862）のことで、本図ではまだ曲がった地道である。この参道が折れ曲がる地点、現在のねねの道と交わるところに一对の石燈籠が描かれるが、この石燈籠は寛延元年（1748）に造られたものである。（『京都・



図111 東大谷・高台寺・雙林寺（右隻第3扇）



図112 東大谷 『都名所図会』

山城寺院神社大事典))

高台寺は『都名所図会』【図 113】と画角を変えるが、境内の建造物の配置や形式はほぼ同じ。雙林寺は『都名所図会』【図 114】と画角を変え、境内の建造物の配置や形式の詳細はわからない。雙林寺は観桜の寺としても名高く、高台寺とともに「京産大本」では春の情景である。東大谷と高台寺が接道する通りを「京産大本」では誤って描いている。東大谷、雙林寺は北西方向から、高台寺は南西方向からの俯瞰で描かれる。

・八坂塔【図 115】：『都名所図会』【図 116】とも画角は同じで、塔の様子や周囲の道の描写もほぼ同じであるが、「京産大本」の方には塔の周囲に木製のようにみえる垣がめぐらされている点が相違する。幕末の『花洛名勝図会』にも同様に垣がめぐらされている。右下の庚申堂の表現も【図 116】と近似する。八坂塔は北西方向からの俯瞰で描かれる。

・建仁寺・安井観音寺【図 117】：建仁寺は『都名所図会』【図 118】と画角を変えるが、境内の建造物の配置や形式はほぼ同じ。「京産大本」は建仁寺を北西方向から俯瞰する構図である。大和大路に面して建つ西門は文化年間(1804-18)に再建されたとされるので、【図 118】の左下に見える門は再建前のものだが、現行の西門と類似しており、「京産大本」での表現の違いも判明できない。西門南側に植栽された藪には、建仁寺垣と思しき垣の描写がある。安井観音寺、現在の安井金毘羅は、『都名所図会』【図 119】と画角は全くの逆で



図 113 高台寺 『都名所図会』

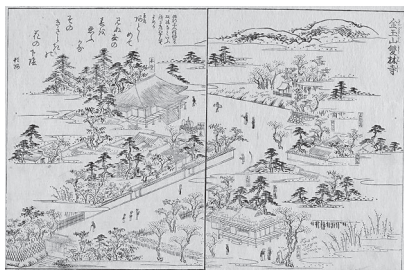


図 114 雙林寺 『都名所図会』

あるが、境内の建造物の配置や形式はほぼ同じ。安井金毘羅には絵馬堂がみえる。【図 117】左下、四条通りに面して「目地地藏」の付箋は仲源寺のことであるが、その手前ある小祠は大神宮である。大神宮は、現在は八坂神社境内に合祀されている。建仁寺、安井観音寺双方とも北西方向から俯瞰した配置で描かれる。

・長楽寺・圓山【図 120】：長楽寺は『都名所図会』【図 121】と画角、境内の

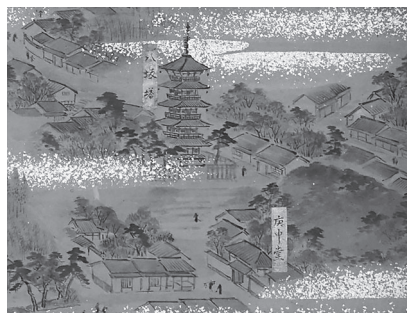


図 115 八坂塔 (右隻第 3 扇)



図 116 八坂塔 『都名所図会』

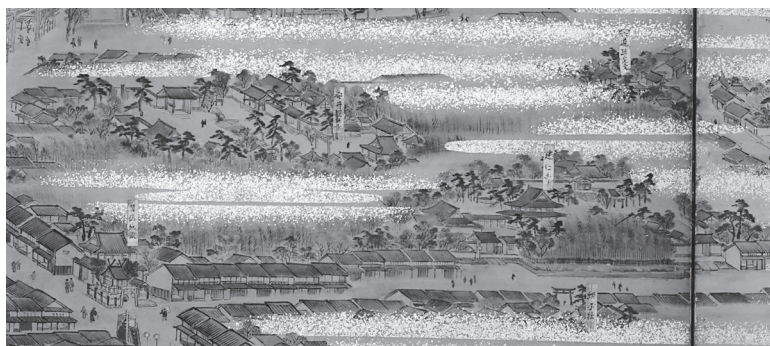


図 117 建仁寺・安井観音寺 (右隻第 3 扇)

建造物の配置や形式もほぼ同じである。石段横の四角く刈られた植生なども同一の描き方であるが、『都名所図会』には山門は描かれていない。圓山安養寺は『都名所図会』【図122】と画角は同じ、境内の建造物の配置や形式についても近似するが、「京産大本」では安養寺の西側は山陰に隠れている。安養

寺には6つの塔頭があり、それぞれ阿弥号を名乗り、市中の隠れ里的な役割を果たしたことは有名である。「京産大本」にも総門左脇に佐阿弥、右側の石垣の上に正阿

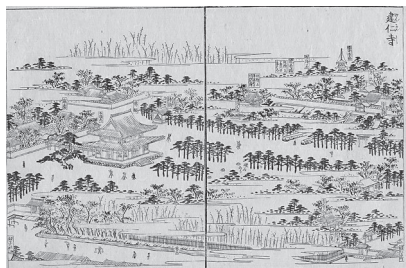


図118 建仁寺 『都名所図会』



図119 安井観勝寺 『都名所図会』



図120 長楽寺・円山(右隻第4扇)



図121 長楽寺 『都名所図会』



図122 円山安養寺 『都名所図会』

弥が描かれる。赤い着物を着た人物らしき姿もあり、女性同伴で遊ぶ粋客が描かれる。長楽寺、圓山安養寺とも北西方向から俯瞰した配置で描かれる。

・知恩院・栗田宮【図123】：知恩院は『都名所図会』【図124・125】と画角、境内の建造物の配置や形式もほぼ同じである。「京産大本」で瓜生石が金雲で

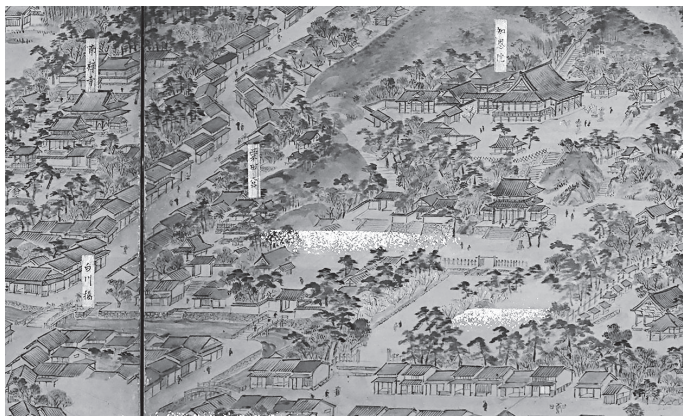


図123 知恩院・栗田宮（右隻第4扇）

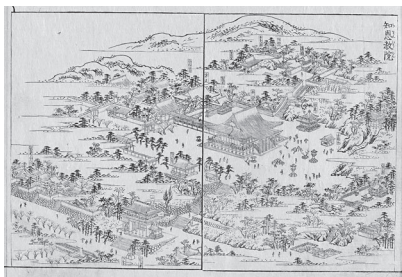


図124 知恩院 『都名所図会』

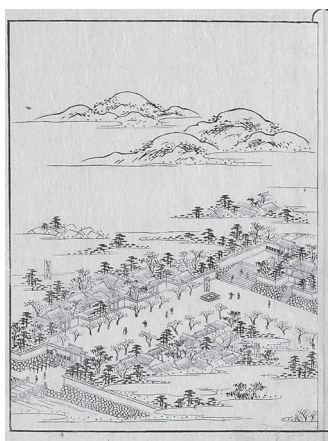


図125 知恩院2『都名所図会』

隠れているのはなぜなのだろう。知恩院の伽藍は西南西方向からの俯瞰である。栗田宮は『都名所図会』【図 126】と画角は異なり、境内の描写についても比較にくい。「京産大本」に「栗田宮」の付箋が貼付されているところは青蓮院門跡である。門跡を栗田宮とした可能性もあるが、本来栗田神社のことを栗田宮とすべきなので、本図で示すと青蓮院の少し上方に現在の栗田神社が描かれており、付箋を誤って貼ったのであろう。また三条通りに架かる石製の白川橋の描写は【図 126】と同じである。

・祇園社【図 127】：本殿から南楼門のラインは、『都名所図会』【図 128】と同様に南西方向からの画角であるが、西楼門は北西方向からの俯瞰で、同一



図 126 栗田『都名所図会』

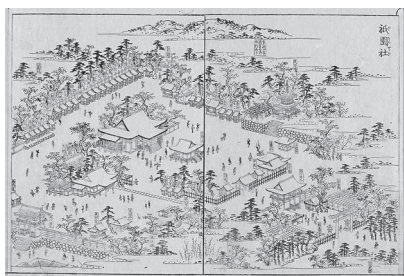


図 128 祇園社『都名所図会』



図 127 祇園社 (右隻第 4 扇)

境内であるにもかかわらず建造物の俯瞰の方角が異なるのは祇園社だけである。鴨川からまっすぐに祇園社西門に到る四条通を、後述する三条通のように折り曲げてしまうことはあまりにも違和感が大きいということと、高台寺など祇園社の南に位置する名所との画面上の接合を考慮した結果であるように思う。『都名所図会』に描かれる本殿の東側に建つ「大日塔」は、寛政7年(1795)正月に焼失したため「京産大本」⁽¹³⁾には描かれていない。ちなみに西門の北側に位置して描かれる疫神社(別名蘇民将来社)は文政6年(1823)頃

に建てられたというが、昭和2年(1927)に現在地に移転した。(八坂神社 2020 : 82 - 85)

・南禅寺・永観堂【図129】：南禅寺は『都名所図会』【図130】と画角を変えるが、『都名所図会』に描かれた境内の建造物の配置や形式はほぼ同じである。「京産大本」の方は山門西の勅使門以西の情景も描くものの、金地院や天授庵といった塔頭は描かれていない。永観堂は『都名所図会』【図131】と



図129 南禅寺・永観堂(右隻第5扇)

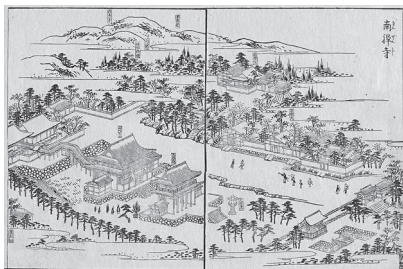


図130 南禅寺 『都名所図会』

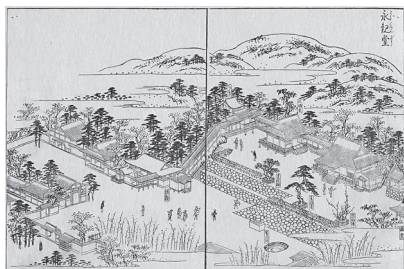


図131 永観堂 『都名所図会』

画角が同じで、境内の建造物の配置や形式は細部に至るまで同じである。【図 129】の永観堂には中門が描かれる。この門は延享元年（1744）に建立されたもので、以後その前の土地が整備され天保 11 年（1840）には総門が建つ⁽¹⁴⁾。「京産大本」では南禅寺・永観堂とも南西方向からの俯瞰した配置で描写している。

・若王子・光雲寺【図 132】：若王子社は『都名所図会』【図 133】と画角、境内の建造物の配置や形式は同じである。双方とも本殿右脇に、熊野から移植したという杉の大木が描かれる。光雲寺は『都名所図会』【図 134】と画角を変えるが、境内の建造物の配置や形式はほぼ同じとみられる。「京産大本」では若王子・光雲寺とも、南西方向からの俯瞰した配置で描写している。

・黒谷・満願寺・真如堂【図 135】：黒谷の金戒光明寺は『都名所図会』【図 136】とは画角、描かれる内容もほぼ同じ。金戒光明寺は安永 5 年（1776）12 月 27 日に御影堂・大方丈などの堂舎、庫裏および僧坊が焼失し、寛政年間



図 132 若王子・光雲寺（右隻第 5 扇）



図 133 若王子 『都名所図会』



図 134 光雲寺 『都名所図会』

(1789～1801) に再興された。『都名所図会』が著された時期(1780年)が罹災時期と重なる。ちなみに壮麗な山門は描かれていないが、それは万延元年(1869)に落成したものである。旧岡崎村内にある日蓮宗満願寺は、『拾遺都名所図会』【図137】と画角は同じであるが、「京産大本」の方は境内の様子は省略されており、宝永元年(1704)建立の本堂、元禄15年(1702)建立の表門のみ描かれる。⁽¹⁵⁾真如堂は『都名所図会』【図138】とは画角、描かれる内容もほぼ同じ。参道には赤く色づく紅葉が印象的な秋の情景である。黒谷・

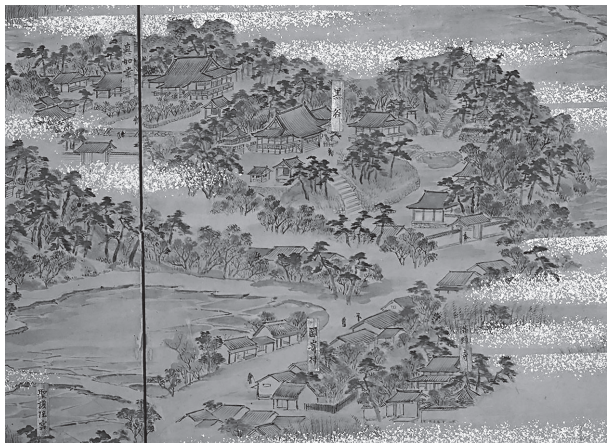


図135 黒谷・満願寺・真如堂(右隻第5・6扇)

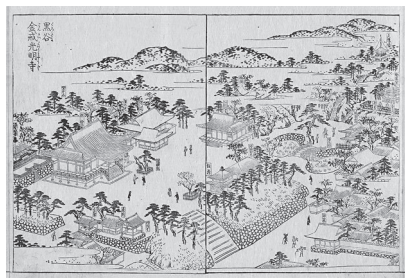


図136 黒谷『都名所図会』

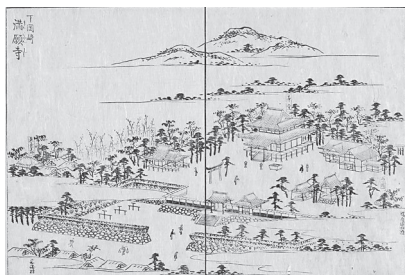


図137 満願寺『拾遺都名所図会』

満願寺・真如堂とも西南西の方向から俯瞰した配置である。

・聖護院・聖護院宮【図 139】:「聖護院」と付箋にあるのは熊野神社のことで、『拾遺都名所図会』【図 140】とは画角は同じであるが、境内の建造物の配置や形式は異なる。当時の熊野神社の鳥居は西面していたので、「京産大本」は北西方向から俯瞰した構図となっている。「聖護院宮」については『都名所図会』、『拾遺都名所図会』ともに図は掲載されていない。熊野神社と聖護院宮は直線で結ばれるべきところであるが、「京産大本」では熊野神社から聖護院宮に至る道を 90 度近く右方へ折れ曲げている。



図 138 真如堂『都名所図会』

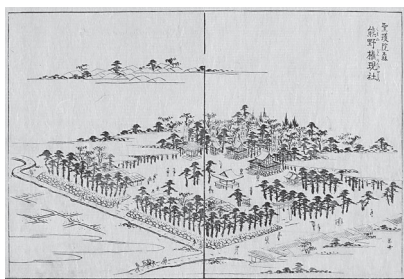


図 140 熊野権現社『拾遺都名所図会』

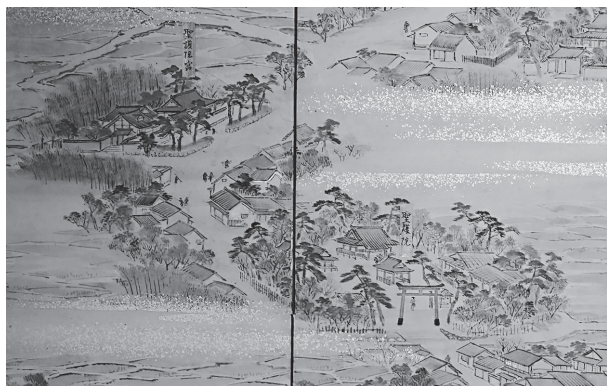


図 139 聖護院・聖護院宮 (右隻第 5・6 扇)

・鹿ヶ谷・銀閣寺【図141】：鹿ヶ谷とあるのは法然院のことで、『都名所図会』【図142】と画角も境内の建造物の配置や形式も同一である。銀閣寺は『都名所図会』【図143】とは、画角も境内の建造物の配置や形式もほぼ同一であるが、『都名所図会』の方は境内西側の描写が欠けており、中門は描かれない。法然院・銀閣寺とも南西方向から俯瞰した構図である。

・吉田神社【図144】：『都名所図会』【図145】と画角も境内の建造物の配置や形式も同一である。双方とも描かれるのは本殿ではなく、15世紀に建立さ



図141 鹿ヶ谷・銀閣寺（右隻第5・6扇）

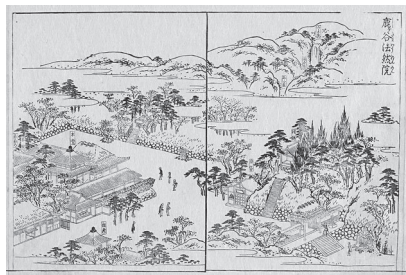


図142 法然院『都名所図会』



図143 銀閣寺『都名所図会』

れた大元宮の方である。現在の大元宮は17世紀初頭の再建。『都名所図会』は大元宮を中心に境内の一部の描写に留まるが、「京産大本」は神楽岡全体を描く。大元宮の西、吉田山の麓にあった吉田村の産土神である木瓜大明神の社殿が赤い鳥居とともに描かれている。現在同社は、北側に移転している。「京産大本」で大元宮の右下あたりに描かれる瓦葺の門構えの建物は新長谷寺であろうか。⁽¹⁶⁾あるいは吉田家が萩原家か。吉田神社は南西方向から俯瞰した構図である。

・百万遍・干菜寺【図146】：百万遍の知恩寺は『都名所図会』【図147】と画角も境内の建造物の配置や形式も同一である。干菜寺（光福寺）は『拾遺都



図144 吉田社（右隻第6扇）



図145 吉田神社 『都名所図会』

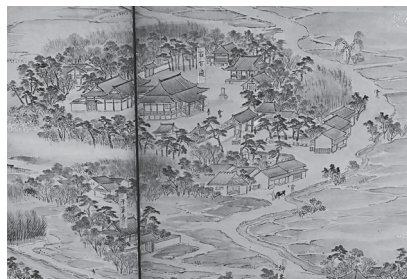


図146 百万遍・干菜寺（右隻第6・7扇）

名所図会』【図 148】と画角は異なり、境内の建造物の配置や形式も「京産大本」が省略して描いているようだ。「京産大本」では本堂の屋根は瓦葺きであるが、『拾遺都名所図会』では藁葺きで軒周りが瓦葺きか板葺きのように描かれる。干菜寺は六斎念仏で有名な寺院で、時期はずれるが元禄 17 年（1704）序の『花洛細見図』には「干菜寺六斎」の図版があり、そこには本堂は藁ぶき屋根に描かれる。双方ともほぼ西方向から俯瞰した構図となっている。

・比叡山【図 149】：比叡山延暦寺は、根本中堂を中心とした東塔地区、釈迦

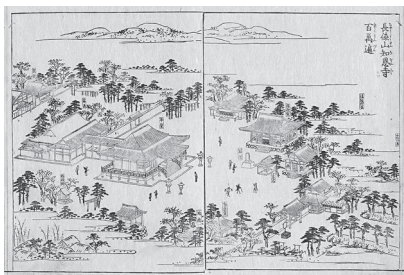


図 147 百万遍 『都名所図会』

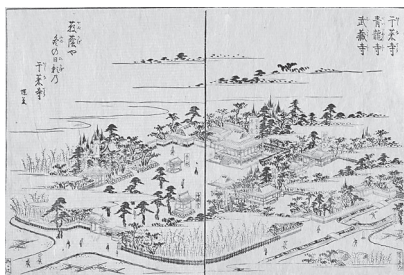


図 148 干菜寺 『拾遺都名所図会』

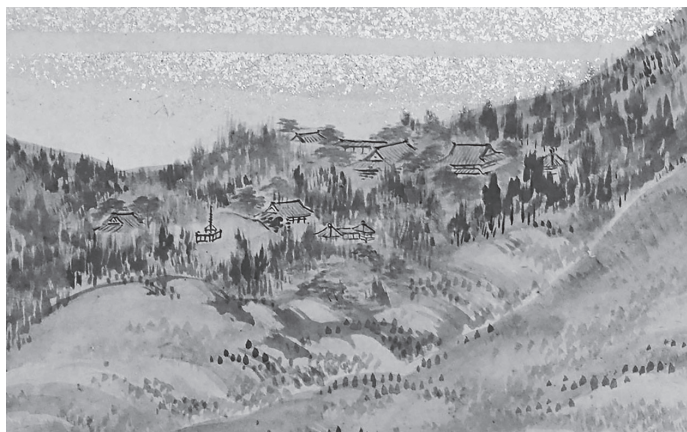


図 149 比叡山（右隻第 7 扇）

堂を中心とした西塔地区、そして横川中堂を中心とした横川地区に分かれるが、「京産大本」では画面右側に右から講堂、戒壇院、根本中堂、山門と、東塔地区を描く。続いて少し下がったところに常行堂と法華堂のふたつの堂を渡り廊下で結んだ特徴的な建築、続いておそらく釈迦堂、そして相輪塔といった西塔地区が描かれる。『都名所図会』【図 150】とは画角は異なり、境内の建造物の配置や形式も「京産大本」では木々に隠れて省略して描いている。京都市中からこうした寺坊は望見できないが、南西方向から俯瞰した構図で描かれる。

・赤山社【図 151】：赤山社、赤山禅院は『都名所図会』【図 152】とは画角は異なるが、境内の建造物の配置や形式はほぼ同一である。「京産大本」では南西方向から俯瞰した構図で描かれる。「御茶屋」とあるのは修学院離宮である。門扉は閉じられている。また「修学寺村」というのは修学院村のことである。現在では修学院の方が通る名称であるが、近世期には修学寺と表記されることもあった。⁽¹⁷⁾

・下鴨社・川合社【図 153】：下鴨社は、『都名所図会』【図 154】と画角も境内の建造物の配置や形式も同一である。河合社(川合社)も『都名所図会』【図 155】と画角も境内の建造物の配置や形式も同一である。「京産大本」では下鴨社の東側に御手洗川が描かれ、沿岸に茶店が並んでいる。また現在はないが西側にも小川が描かれる。「京産大本」では南西方向から俯瞰した構図で描



図 150 延暦寺『都名所図会』

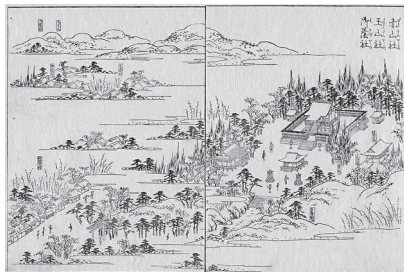


図 152 赤山社『都名所図会』



図 151 赤山社（右隻第7扇）

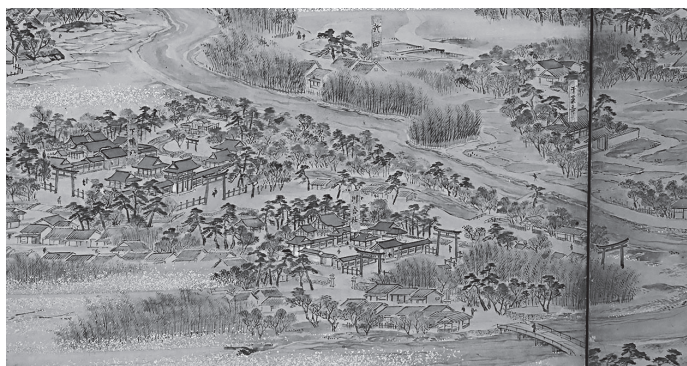


図 153 下鴨社・川合社

かれる。

・上賀茂社【図 156】：『都名所図会』【図 157・158】と画角も境内の建造物の配置や形式も同一であるものの「京産大本」は空間を圧縮して描かれ、かつ上賀茂社の本殿部分が一部画面から外れている。第1扇の伏見稻荷や五条橋同様に、画面が切り取られた感があり、不自然な画面構成であることは否めない。一方「京産大本」は境外の様子も広く描かれる。一の鳥居を出て画面

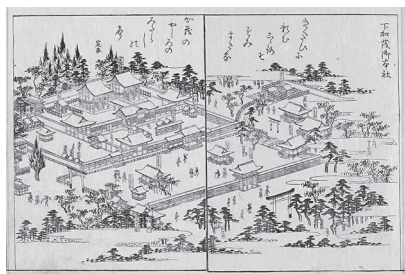


図 154 下加茂社『都名所図会』



図 155 河合社『都名所図会』



図 156 上賀茂神社

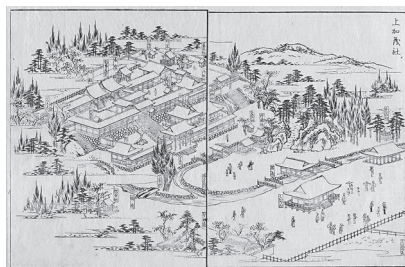


図 157 上賀茂神社『都名所図会』



図 158 加茂競馬『都名所図会』

右手には明神川の流れに沿って土塀を伴った杜家町の描写がされ、その奥に赤い鳥居があるが、これは上賀茂村の産土神である大田神社であろう。さらにその先の民家の境界には門柱がみえる。集落の出入りに建つ惣門であろうか。「京産大本」では全体的に、南西方向から俯瞰した構図で描かれる。

小括 (2(2)と(3)について) :

以上が、「京産大本」で描かれた名所(寺社)について、『都名所図会』をはじめとする近世後期の地誌類の挿図と比較した結果である。地誌類等の挿図と比較した意図は、第一に、「京産大本」の作者は同図を独自に取材して描いたのか、それとも手本があるのかを見極めることにあった。村落や道路、田地や植生の形状はその見極めには不向きであるので、寺社をはじめとする名所に描かれる建造物の形状や配置、石垣や境内の地形などを比較したのである。第二には、手本があったとしても、まったくの写しかそれとも取材により改変したのかについて判断するためである。微妙な差異ではあったとしてもそこに作成年代を比定する材料が残されていると考えたからである。

結果、「京産大本」の作者は、『都名所図会』(安永9年(1780))、『拾遺都名所図会』(天明7年(1787))を参照として描いていた可能性が高いことが判明した。しかしながら単に写し取っただけでないことは、境内の建造物の内容や配置、植生が相違するものも見受けられ、かつ図の画角が異なるものが少なからずあることから判断できる。

まず画角の違いからまとめてみよう。『都名所図会』等の場合、寺社の境内が正面から捉えられるような画角で描いている。冊子の挿図であるから当たり前のことであり、読み手が最も理解しやすい画角で描かれているのである。一方の「京産大本」の場合は、広い画面内に多数の寺社を配する必要がある、周囲の風景とともに、隣り合う名所との空間的な破綻を最小限に抑えようとする。もちろんそうした破綻を金雲で回避する手段はあるとしても、後述するように、本図の作者はなるべく金雲を使用せずに空間的な破綻を回避する

努力をしている。

寺社を描く画角には一定の法則があり、それは作者が本図を描くにあたって、どこに視点場を設定したのかの理解につながる。そのため各所解説の最後に画角について記したのだが、左隻と右隻では若干相違する。

比較的わかりやすい結果が出た右隻からみてみよう。右隻全扇下部に賀茂川の滔々たる流れとともに、多くの橋が架けられている様が描かれる。これらの橋はすべて、画面左上から右下に向かって斜めに描かれる。すなわち橋については北西方向からの俯瞰図となっているのである。一方の名所については、現在の丸太町から二条よりも北の方に位置するものは南西方向から、南の方に位置するものは北西方向からの俯瞰図となっている。右隻に描かれる名所などの配置を違和感なく収めているのは、実際は蹴上辺りから大きく南に曲がる三条通を、そのずいぶん手前の白川橋辺りから南に折り曲げて表現することで、名所が集中する岡崎の南から五条までの空間を確保している。同様に三条通り以北の鴨川を渡る道は、すべからく東岸に入ったところではほぼ90度南に折れ曲がるように描かれる。よって右隻については、橋の表現は除き、丸太町～二条あたりの洛中を視点場にしてよいだろう。上述の原則から外れる名所として、聖護院（現熊野神社）、また清水寺を中心として第2・3扇上部に描かれる高台寺、靈山正法寺、清閑寺とが南西方向からの俯瞰である。

一方の左隻でも西山の北方に位置する名所は南東方向から、南方のそれは北東方向からの俯瞰図が多くなるが、右隻に比して描かれる対象範囲が広いためかいささか複雑である。左隻についても各扇下部の描写をみれば、二条城は北東からの俯瞰、その北に広がる西陣の町家群は南東方向からの俯瞰であるので、ちょうど画面中央、右隻同様に現丸太町通りあたりの洛中が視点場となっている。【図159】一方で例外もまみられる。第4扇以降、画面右上から左下に向かい桂川が流れるがその左岸（東側）、そして画面で言えば手前側の天地の中程より下部あたりに横一線で並ぶ名所、すなわち金閣寺（第



図 159 西陣の町並み（左隻第3・4扇）

2扇)、平野社(第3扇)、妙心寺(第4扇)については、本来南東からの俯瞰であるべきところが北東方向からの俯瞰に、そして木嶋社(第5扇)は本来北東からの俯瞰であるべき位置であるが南東方向からの俯瞰で描かれている。ここでも右隻同様に、街道を90度折り曲げることで、画面上の不自然さを解消させている。すなわち、太秦広隆寺と木嶋神社は実際には二条城の真西に東西に並ぶところを、両所が接する街道を90度折り曲げて画面に無理なく収まるようにし、さらに木嶋神社の俯瞰角度を変更している。こうした画面の折り畳みによる空間破綻の回避とともに、左隻第1から第4扇にかけては、他の箇所と比べて金雲が多用され、位置関係の不自然さは伝統的なやまと絵の手法でも回避しようとしている。

第5扇の上部から第8扇の下部にかけて桂川が画面を斜めに流れる。桂川右岸の村々と名所の俯瞰角度には一定の法則がある。それは嵐山から続く西山山中の名所のほとんどが南東方向からの俯瞰図となっていることである。唯一柳谷観音は北東方向からの俯瞰ではあるが、先述したように作者は柳谷観音を二つ描くというミス⁽¹⁸⁾を犯しているので考慮外とする。一方で西山地域の平野部に位置する、長岡天満宮、向日神社、久遠寺は北東方向からの俯瞰であり、左隻の視点場と考えられる丸太町近辺の洛中から見た向きである。また桂川に近い、吉祥院天満宮、蔵王堂については、南東方向からの俯瞰で、西山山中の名所と同様である。このように左隻の第5～8扇部分は最下部を除きかなり錯綜している。特に西山山中⁽¹⁸⁾に関しては、視点場は京都市中から離れて乙訓辺りにあってもよいような画角で描かれているのである。

次に本図の作成年代を絞り込んでいきたい。2(2)と2(3)から特に作成年代比定のポイントになる項目を記したのが【図160】である。他にも項目としてはあげられるものが多いが煩瑣になるので、省略した。先に見たように「京産大本」の作者は、先行する地誌類の描写を参考としたことはほぼ間違いない。その一方で画像の使用には慎重であり、用意周到にマイナーチェンジをしていることがわかった。そうしたマイナーチェンジのなかで、景観年代の手掛かりになる要素を書き出してみたのが【図160】⁽¹⁹⁾である。その結果、「京産大本」の作成時期は、天保2年(1831)から天保11年(1840)までの間に作成されたとしてよいだろう。決め手になったのは向日神社の本殿の向きと、伏見稲荷大社の外拝殿の屋根型である。詳細はすでに述べたので繰り返さないが、【図160】のいずれの項目も地誌類の描写とは異なる、あるいはマイナーチェンジの跡を示している図を選んだ。ただし、この比定に反する事実もある。それは等持院本堂の表現が1808年に焼失した旧本堂であること、そして1798年に焼失した大仏殿が描かれていることである。大仏殿に関しては焼失後も長く京都のランドマークとして描かれることがままあるので、本品もその例に倣ったものと推測される。等持院については描写表現が『都名所図会』と同じであることから、焼失した二重屋根の旧本堂の形状のまま写したものであると判断した。

図番号	項 目	1790	1800	1810	1820	1830	1840	1850	1860
図14	今宮神社の絵馬舎(1800年建立)が描かれる		⇒						
図29	御室八十八カ所霊場が描かれる。伝承では同霊場は1827年にはじまる					⇒			
図35	等持院本堂の表現が1808年に焼失した旧本堂である			⇐					
図72	鳥原大門に屋根は描かれない。屋根がかかるのは1867年								⇐
図72	鳥原の堀が描かれる。堀がなくなるのは1842年以降。						⇐		
図78	1831年からの改修で向日神社本殿が東を向く					⇒			
図78	向日神社参道に仮並木が描かれる。文政年間に植樹される				⇒				
図89	稲荷大社の外拝殿は裏入りに描く。平入りになるのは1840年から						⇐		
図92	東福寺開山堂が描かれる。開山堂は1819年に焼失、1823年に再建される				⇐ ⇒				
図93	大仏殿が描かれる。大仏殿は1798年に焼失		⇐						
図100	西大谷参道には木製の橋、1956年に架かるめがね橋はない							⇐	
図126	疫神社が1823年に建立				⇒				
図128	1840年に建てられる永観堂の総門は描かれない						⇐		

図160 作成年代比定

(4)道・橋・出入り口・渡しの表現

道の表現：

他の洛外図は絵画的な表現はあるにせよ、真上から見た図であるがゆえに、道は地図的に表現される。一方「京産大本」は洛中洛外図や名所図のように俯瞰的に洛外を捉えているので、道の表現については地図通りというわけではない。道に関してはかなりデフォルメした描き方、または金雲で矛盾を隠す手法がとられていた。

そのひとつが実際は直線に近い道を折り曲げることで、画面上の収まりを達成する手法である。左隻では先述の太秦広隆寺と木嶋神社の関係【図 59】などがそうであるし、右隻では熊野神社と聖護院宮の位置関係【図 139】をはじめ、三条大橋以北の鴨川に架かった橋を東にわたってからの道がいずれも 90 度近く右折させている。【図 2】

また両隻とも画面右側、第 1 扇から第 4 扇にかけて金雲を多用して、道の矛盾を隠している。例えば右隻第 1・2 扇に描かれる稲荷社、東福寺、三十三間堂、方広寺大仏は伏見から続く街道（現本町通）とそれに並走する大和大路通沿いに南北に並ぶが、それを真横に並べて描くのではなく斜めに配置することで、この巨大な敷地を持つ 4 者をわずかに 1 扇半の中に収めている。そのため本来まっすぐの道は金雲によって隠され、あたかも 3 本の道があるかのように描かれている。それに続く高台寺前の通り（現在はねねの道と称する）と下河原通りも金雲を使いながら上手に接合させている。

道の色は土色で、部分的に少し赤みを帯びさせたり、黒みを帯びさせたりしたところもみられるが、極端に赤みを足した箇所がある。それは左隻第 1 扇の菩提の滝のところである。【図 161】（口絵）菩提の滝の滝壺に溜まった川砂は、北山杉の磨き丸太の研磨に使用されたことで有名である。菩提の滝の周囲の山は赤土であり、本図はその特徴をよく描いている。ちなみに滝横の岩の形状や、役行者を祀ったであろう祠（現在祠は現存しない）も描かれており、この部分を見る限り作者ははきちんと現地に足を運んで描いたと想

像できる。

橋の表現：

「京産大本」の特徴のひとつは、橋の表現の豊かさである。石橋、木橋、土橋を描き分け、橋桁や欄干、また踊り場などを表現している。描かれた橋は87カ所、そのうち石橋が13、木橋が54、土橋が19、不明1である。詳細は表3に示す。なおこの表では、寺社の境内地内の橋についてはカウントしていない。

「京産大本」では橋の形状がよくわかる。たとえば本図から江戸後期の京都の橋は、想像外に欄干付きのものが多かったことがわかった。欄干が描かれているのは46橋であり、描かれた半数以上の橋に欄干がついていたことになる。⁽³⁰⁾こうした表現が実際にそうであったのかどうかについてはなかなか判断が難しいところではあるものの、かなり実態に近かったのではないかと推測できる根拠として、いくつかの橋とその周辺の描写を紹介しておく。

まずひととき目立つのが右隻の五条大橋と三条大橋である。双方とも橋脚は薄緑に彩色され、石柱であることを強く主張し、3本ずつ並ぶ様子が描かれる。3本の橋脚の上に両側と中央の3カ所に桁材が渡され、そこから左右の桁材に床板を渡す構造である。【図162】は三条大橋であるが橋詰の欄干がハの字に広がっている点も、数多くの他の資料からも確認できる。

二条から五条あたりの鴨川左岸の様子は、微細に描かれている。【図1】それを「京産大本」の作成年代とほぼ同時期である「御蔵入城州愛宕郡四條川原西組同東組五條川原一紙図面」天保8年(1837)【図163】(口絵)と照合してみたところ、護岸沿いの通路の通り方が同じであることが確認できた。また地図では分からない、護岸上の川端通と民家の様子がうかがえて面白いのでいくつか画像を紹介しておきたい。

【図164】は四条橋東詰の様子である。画面右端の護岸が鴨川に張り出したところが団栗辻子で、そこから四条通を過ぎ白川の川端まで、鴨川沿いに道が通っているのがわかる。四条下るあたりには鴨川の石垣の上に木柵が備え

られ、川面に下りる階段が設けられている。こうした階段は納涼床用のしつらえであろうか。四条より上のほうにも同様に木柵が続き、町家には暖簾がかかっているの、小料理屋などが並んでいたのであろう。川沿いの道はそのまま白川沿いに続き、石造りの大和橋（画面左端）へ続く。団栗辻子より下流（画面右端）は川沿いの通路はなく、画面からは切れてはいるがそのまま五条まで家並みが続いている。

【図 162】に描かれる三条下る辺りから白川の合流箇所までの鴨川護岸上に



図 162 三条大橋（右隻第4扇）

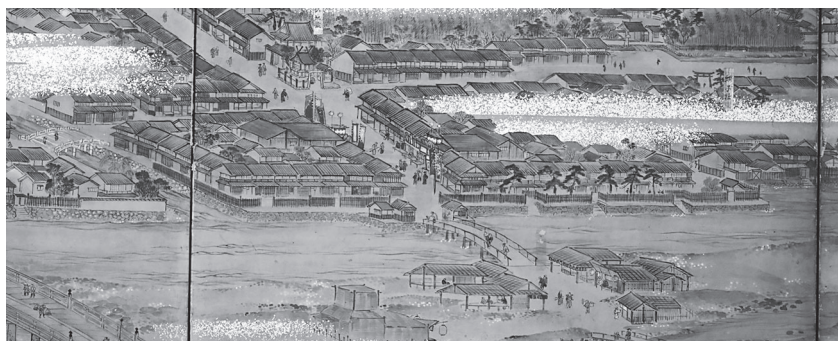


図 164 四条橋東詰（右隻第3扇）

は道は通っていない。三条大橋東詰めの南側に鴨川に下りる傾斜路は車道である。三条川端の檀王さん(檀王法林寺)から北へは通路があり、そのまま二条通りへと続く。【図 165】は二条河原や二条橋を描くが、三条通りからの通路(現川端通り)はそのまま鴨川左岸を北上している。欄干付きの二条橋を渡ると、享保年間に開かれた遊郭である二条新地が描かれる。二条川原も丸太町川原も中洲に茶店が描かれる。図にはないがさらに北の現在の今出川通りにあたる地点の中洲にも茶店が描かれ、四条や松原川原だけでなく鴨川の中洲を利用した茶店は広がりを見せていたようである。二条新地の北側(左)に方形のプラットフォーム状の盛土(周囲は石組みか)があり、その西の鴨川岸には杭が多数打たれている様子がみえる。このプラットフォーム状の施設は熊野神社の御旅所の可能性⁽²¹⁾があるものの定かではない。識者のご教示を乞いたい。

村落部の橋も詳細に描かれる。【図 166】は数少ない高野川沿いの村落を描いたもので、上高野村の部分を抜き出した。左下の木橋は花園橋であろう。



図 165 二条河原(右隻第5扇)

橋のたもとに茶店が描かれる。花園橋は出町口からほぼ1里の距離にあり、八瀬、大原に抜ける街道と岩倉に抜ける街道の分岐にあたる。三宅八幡神社の境内には絵馬堂が描かれている。(画面中央左寄り) 三宅八幡神社は江戸中期頃に創設されたと考えられる神社であり、江戸後期には痘の虫封じに靈験あらたかということで人気を集めはじめ、現在まで子供の健康祈願に関する多くの絵馬が奉納⁽²²⁾されている。天保4年(1833)に高野村から京都奉行所に差し出した村内寺社の書き上げには絵馬堂が記されており(『洛北上高野八幡さんの絵馬』編集委員会 2005: 50)、江戸後期には都市部から子供の健康祈願の参拝が増えていった事実を裏付けている。「京産大本」で絵馬堂を描き、その脇の鳥居下に母子の姿が描かれているのも、そうした信仰の高まりを本図の作者も認知していたことが知れる。上高野の集落の中心は高野川の左岸(図の右側)なので、そこから三宅八幡側には土橋が渡されており、土橋の描写表現の参考として拡大掲載した。また、上高野の集落内には、明治初期に伏見稻荷社に遷宮した玉山社が描かれる。



図 166 花園橋か(右隻第7扇)

本品を評価するにあたり、筆者を最も悩ましたのが上野橋【図 167】である。というのも、この橋に踊り場が描かれているからである。江戸期に踊り場を併設した橋は多くはないが、江戸の永代橋や京都では宇治橋といったかなりの名橋に限られる。上野橋になぜ踊り場が必要であったのか、その理由がわからないのである。踊り場を設けること自体、なにがしかを橋上から見物する必要があったと考えるべきなのだが、上野橋の踊り場は下流方向に向けて設けられており、上流の嵐山の景勝を愛でるためのものではない。(実際上野橋から嵐山はよく見えない) では下流方向に何かあるかと言えば、特に思いつくものがない。唯一松尾大社の神幸祭時の船渡御が考えられる。現在では桂離宮の北東あたりから出るが、江戸時代には船渡御はもう少し上流、現在の阪急電車の鉄橋あたりの浜から出御したという伝承がある。たとえそうであったとしても上野橋から直線距離で 1.3 キロメートルほどあり、見物するにはずいぶんと距離があるのである。

上野橋はすでに元禄期には架けられていた可能性が高いが、18 世紀前半の⁽²³⁾



図 167 上野橋 (左隻第 6 扇)

地図類にはまったく記載がない。記録に登場するのが宝暦4年(1754)刊の『山城名跡巡行志』で、そこには「土橋」と記される⁽²⁴⁾。18世紀後半からの地図類には記載されるが、地図であるのでその形状までは描かれない。また『都名所図会』には描かれるが(【図72】の右上あたり)、やはり土橋のように描かれている。ただし桂川に架かる橋であるので、村内の小川に架かる橋のように簡単な造りではなかったであろう。「京産大本」の描写が事実であれば、『都名所図会』が刊行されてから約半世紀後に立派な踊り場付きの木橋となったのであろうか。識者の評価を待ちたい。

出入り口・渡しの表現：

「京産大本」は京や村の出入り口に関しての表現にも気を配る。

街道による京都の出入り口については付箋が貼られ、右隻には「渋谷越」(第2扇)、「蹴上」(第4扇)、「山中越」(第6扇)が、左隻には「峠地藏」(第6扇)が示されている。また右隻には洛中の出入り口として「荒神口」(第5扇)【図165】、「出町口」(第6扇)、左隻には「四ツ塚」(第8扇)が示される。

【図168】は加茂川と高野川が合流して鴨川となる現在の出町柳付近を描く。同所には「出町口」「砂川岸」「柳茶屋」の付箋が貼られている。鴨川西岸にも茶店風の建物がみえるが、中洲、東岸の柳ヶ辻にも茶店が営業して賑わっている風に描かれる。また砂川岸にも茶屋が描かれる。砂川岸に茶屋ができたのは19世紀の末頃か⁽²⁵⁾。このあたりが洛中町続きの外れで、ここから岩倉や大原、北白川、一条寺などへと街道が向かう。

【図88】(右隻第8扇)には、東寺の南門前の九条通を東行する牛に曳かせた荷車が描かれている。米俵か何かを摘んでいるのであろうか、車輪が埋まっているように描かれているが、埋まっているのではなく、車道が人馬道よりも一段低いところに通されていたからである。九条通から四ツ塚をへて鳥羽街道を南に折れたところには濃い茶色で二本の線が描かれているが、これが車道を表現しているのであろう⁽²⁶⁾。九条通は元禄15年(1702)段階ですでに人馬道と車道の分離がなされており、車道は御土居堀の低地に設けられていた



図 168 出町柳付近 (右隻第 6 扇)

のである。(車石・車道研究会(フィールドワーク実行委員会)2013:3)図の荷車の南側の藪は御土居である。

洛中と洛外の境としては目を引くのは何といってもお土居の藪の描写である。お土居藪は、左隻第1扇の鷹峯から第7扇の塩小路村辺りまで続く。洛中からの街道がお土居の藪を切り崩し、その向こうに流れる紙屋川や天神川に架かる橋を描いている。お土居の切り崩しの表現は、大北山村へ抜ける道と紙屋川に架かる高橋、その向こうに天神森(わら天神)を描く【図169】(第3扇)、平野神社へ至る道と木橋とその左の土橋【図36】(第3扇)、【図170】(第5扇)では画面右から、北野経堂あたりからお土居を抜けて紙屋川(天神川)に架かる橋(現紙屋川橋)、大將軍神社前的一条通がお土居を抜けて架かる石橋(現一條橋)、下立売通が紙屋川に架かる橋(現上ノ下立売橋)、そして二条城からのびる二条通が紙屋川に架かる橋が描かれる。このようにお土居の藪が切り崩されている様子が左隻に10カ所描かれている。下立売通や二条通

が通るお土居部分には藪の周りに柵が設けられ、その脇には広葉樹のような植生もみられる。

その他、出入り口ということであれば、京都に入る主要街道にある六地藏のうち、鞍馬街道沿いの深泥池【図177】、周山街道沿いの常盤、そして丹波街道沿いの桂【図71】の3カ所の地藏堂が描かれていることも指摘しておきたい。いずれも付箋は貼られてはいないものの、藁葺屋根の民家の中で瓦葺き・宝形造の屋根が主張している⁽²⁸⁾。

また村落境界に柵、もしくは木戸門を設ける描写もみられる。右隻では唯一上賀茂村の東出口、深泥池村へと続く道、大田神社のものと思われる鳥居

の横に木戸門のような描写がある。(【図156】の画面中央上方)左隻では鷹峯の街村を抜けて千束にいたる道に柵が設けられている。(【図12】の画面中央)北野経堂の南側の通り(今小路通)に門がある。その横に小屋が2棟あり、それぞれに縦長の暖簾(藍染であろうか)がかかる。(【図170】の画面右下方)この小屋はここに2



図169 高橋(左隻第3扇)



図170 お土居の藪と道(左隻第5扇)

軒描かれるが、同様の描写の小屋が四条小橋西詰にも描かれる。(【図 171】の画面右下) 縦長の暖簾の小屋は何を意味するのであろうか。識者のご教示を乞いたい。奥海印寺下の集落の端にも立派な木戸門が描かれるが(【図 76】)、これは大山崎の黒門を描こうとして誤記した可能性⁽²⁹⁾がある。先述したように、「京産大本」の作者は柳谷観音を二つ描くというようなミスを犯しており、この付近の誤表現は目立つ。

大寺院の門前町に木戸が設けられる描写はすでに名所の解説の項で記したが、改めて列挙しておく。まず大徳寺の境内東側に南北双方に木戸門がある。【図 23】北側の門については同時期の複数の地図類にも表記がみられる。等持院門前の集落にも出入り口 2 カ所に木戸門【図 35】が描かれる。妙心寺の南側の下立売通(街道)には塔頭以外に在家の民家もあるが、その東西に惣門が描かれる。【図 49】また遍照心寺の門前北入口に木戸門がある【図 86】

高札場の表記は 3 カ所ある。ひとつは右隻の三条大橋西詰北側(【図 162】の画面右下)に描かれている。東海道の終着点の一つである三条大橋の高札場については図面もあり、屋根付きで高さが 1 丈 3 尺(約 4 メートル)もある大きなものであるが、⁽³⁰⁾「京産大本」は背後からの描写であるもののその形状がよく描かれている。左隻第 6 扇の丹波街道(山陰道)沿いの宿場である檜原宿の京都からの入り口付近に高札場の描写がある。(【図 172】画面中央左

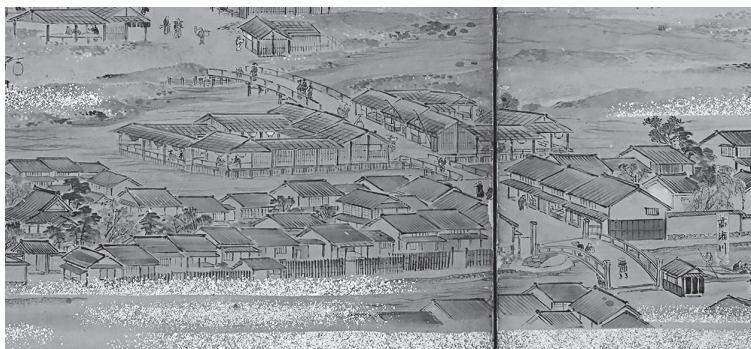


図 171 四条小橋(右隻第 2 扇)

寄り) 白く光る土蔵が描かれた民家は、檜原の本陣玉村家であろうか。同じく左隻第6扇、洛中から出てすぐの丹波街道沿いの集落である西七条村の入り口にも高札場らしきものが描かれている。【図173】(画面左寄り)

渡しについては、松尾社の鳥居下から桂川の東岸に渡る渡し船に、船頭を入れて8名の男女が乗る様子が描かれる。【図51・54】図では梅宮と長福寺の間のように見えるが、東岸の渡河点は四条通へと続く街道である。「改正京町繪圖細見大成」(天保2年(1831))にも同所には「舟渡し」と記される。その下流に「桂ノ渡し」がある。この渡しは丹波街道の桂川渡河点であり、西岸の下桂と東岸の川勝寺村を結んだ。「京産大本」には桂川東岸に家の前に材木を立てかけた瓦屋根の家々が描かれているが、ここが筏の陸揚げ場であった桂材木町であろう。付箋には「桂ノ里」とあり、この当時はそのように通称されていたのであろうか。【図174】ちなみに「川勝寺村」の付箋の貼付位置が久世橋の東詰めになっているがそれは間違いで、本来は「桂ノ里」の左



図172 檜原(左隻第6扇)

下の集落に貼付するべきである。その集落脇を流れるのが御室川のつもりで描いているようだが桂川に注いでおり、これもまた誤描写である。

(5)村や町の表現

村の表現：

村の表現で目立つのが、集落の周りの竹藪の植生である。藪の表現は左隻



図 173 西七条村 (左隻第 6 扇)



図 174 桂ノ渡シ (左隻第 6 扇)

により強く示されている。江戸時代以前から京郊村落には竹を税として納めることが課せられていたが、江戸時代に入ってからも継続され、詳細な記録が村方文書の中でも数多く残っている。竹の上納の⁽³¹⁾ことを「上ケ竹」「上竹」称し、藪の面積に応じて上納が義務付けられていた。乙訓の村では藪地一筆ごとに間数・反別・所有者とそこにかかる上納竹本数が記されており、一筆ごとに「四壁」「外藪」といった藪の区分が記されている。すなわち「四壁」というのは屋敷地の四周に壁のように植栽された藪、「外藪」というのは集落の外の藪のことである。(玉城玲子 1989 : 16-17) 上ケ竹は毎年秋に上納され、二条城の竹蔵に納められた。竹蔵は二条城の南東、御池通と西堀川通の角地にあった。現在大阪市立住まいのミュージアムに寄託されている、江戸幕府京都大工頭の中井家伝来の図面等のなかに、紙本墨書著色「二条御城外廻之図」(享保 17 (1732))⁽³²⁾があるが、そこに竹蔵の位置が記されている。【図 175】先述のお土居の藪もそうなのだが、各村においても竹林の勝手な伐採は戒められ、特に御土居の藪の伐採の禁令はたびたび出されていた。⁽³³⁾村落描写の一例として、妙心寺東側の木辻村とその南の安井村の描写をあげておく。【図 176】このように民家の周りに竹藪が描かれる描写は多くみられる。木辻村に



図 176 安井村・木辻村 (左隻第 5 扇)

寺院か楼閣と思われる建物がある。その背後にテント状の構造物がそびえている。これは何か、あるいは下書きの消し忘れなのか、筆者には判断がつかなかったので図を掲載し示しておく。

民家の特徴を描き分けているのではないかとと思われる描写についても例示しておきたい。修学院村の民家の表現が、一部石積みの上に居を構える水防家屋のような描写となっている。【図 151】確かに音羽川の扇状地上に集落が広がる修学院村では、たびたび音羽川の氾濫に悩まされたのであって、現在ではあまり気づかないが、水防家屋が多かったのであろう。修学院村では平入側に廂を張り出した表現の民家（農家）が4棟描かれている。これらの廂にはきちんと受け柱まで描かれているのが興味深い。このように受け柱付きの廂を描くのは、隣村の一条寺に1棟、上高野村に1棟【図 166】、深泥池村でも2棟（そのうちの1棟は妻側に設置）確認できる。【図 177】上賀茂村では、明神川沿いに土塀が続く社家住宅が前面に描かれており、農家は藪の中に埋もれて描かれ、廂の張り出した農家は確認できない。また鷹峯には同様の民家が5棟描かれている。（【図 12】は鷹峯街道沿いの村の部分である。）平入



図 177 深泥池村（右隻第8扇）

側に廂を大きく張り出す形式の農家は、現在でも上賀茂や深泥池でも見ることができる。こうした張り出し廂は2メートル以上に及ぶものもあり、廂の下で野菜の調整作業などが行われた。野菜の振り売りなどが盛んであった洛北の農家に特徴的な民家の造作といえるように思う。ちなみにこうした造作は左隻の南の方の村落ではあまり見いだせない。もちろん街道沿いの街村集落の民家も廂が出るものが多いが、受け柱を伴った廂までは描かれてはいないのであって、「京産大本」の作者、あるいは発注者の眼は相当に行き届いていると思う。

町の表現：

本図ではほとんど描かれてはいないが町の方の描写も紹介しておく。

まずは右隻下部に描かれる高瀬川沿いの町並みである。図では五条から四条間を取り出した。【図 178】先に四条界隈の鴨川東岸の川岸の描写の正確さを確認したところであるが、高瀬川筋も同様に川筋の民家や、高瀬舟の曳き子をよく描いている。高瀬舟にしつらえられた曳行のための綱を縛る柱に3本の綱が結わえられ、3名の曳き子が高瀬川の東側の道をひいている姿が描かれる。艫の方には船頭が乗りこみ、櫓か舵を手に行っている。高瀬舟は五条と松原間に2隻、松原より上に1隻、そして四条下るに1隻描かれるが、下の3隻は曳き子がひいているが、四条小橋近くの1隻は、船頭が船首部分で櫓か竿を使っている様に描かれる。地点によってこうした川船の進め方に差



図 178 高瀬川沿いの町並み（右隻第1・2扇）

があったのであろうか。先の【図 163】をみれば四条より少し下で鴨川の水を高瀬川に引き込んでいるので、それより上の方は曳き子なしで上ることもあったのであろうか。また四条小橋下の高瀬川西岸に、覆い屋だけの荷上場のような建物がある。高瀬川沿いの民家は、木屋町という名の通り多くの材木商や薪炭商が軒を連ねている情景が活写されている。また木屋町の鴨川側の民家の中には総二階作りと思しき建物が目立つが、料理屋であらうか。

左隻には西陣の町並みの一部が北野神社境内の下あたり、第3－4扇にかけて描かれる。【図 159】先述したように南東方向からの俯瞰図である。瓦屋根や土蔵が目立つ。

二条城の描写で興味深いものがある。【図 179】北東方向からの俯瞰である二条城は、東大手門前の広場が描かれ、二条城の堀周りの広い街路空間から西堀川通へ入るところ、木戸門脇の二条城側に覆い屋根だけの建物があり（画面左下）、青い着物を着た男性らしき人物が二人描かれる（図 179 の画面左下）。先ほどの「二条御城外廻之図」【図 175】にはこの建物の位置に「辻番」と記載されており、これが辻番小屋であることは間違いなく、「京産大本」はその造作がわかる資料である。

・その他：

本図は、人物を描くものの、祭礼や年中行事等のハレの場面は全く描かれない。ただ五山の送り火の火床については、景物のように描かれているので、

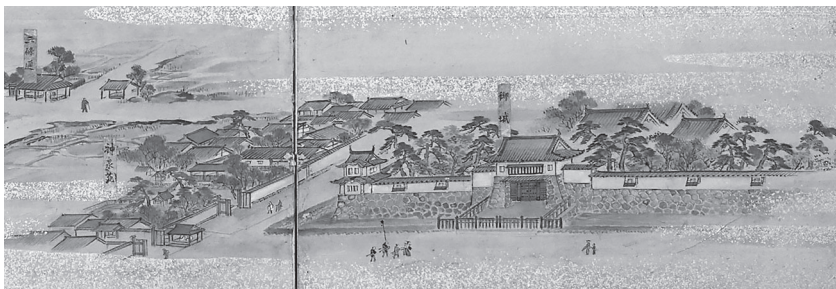


図 179 二条城（左隻第5・6扇）

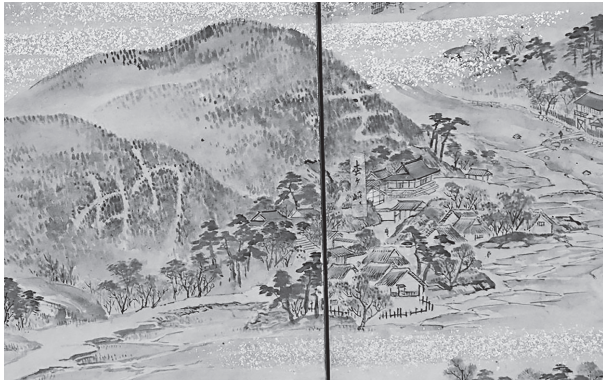


図 180 松ヶ崎妙法（右隻第7・8扇）

図として掲載しておく。右隻第6扇上部に大文字【図 141】、右隻第7・8扇に松ヶ崎妙法【図 180】、左隻第2扇に左大文字【図 21】が描かれる。船形万燈籠と鳥居形松明は描かれていない。

3. まとめにかえて

長々と「京産大本」の描写表現についてみてきたが、作品評価の視点から、現段階で分かり得るところや疑問点、また推測できるところをまとめておきたい。

制作年代とその動機：先述したように本品の制作年代は天保2年（1831）から同11年（1840）の約10年間であることはほぼ間違いがない。ではこの間になぜこうした洛外図を描く必要があったのか。これまで見てきたように本図はかなり京都の町や村をよくわかった人物が作成、または発注をし、細部にこだわりを持って描いた（描かせた）可能性が高いが、筆者は文政京都地震が本図作成の契機になったのではないかと推測している。文政13年（1830）7月2日にマグニチュード6・5程度、愛宕山付近が震央と考えられる地震が発生した。この地震を契機として1830年12月に元号が天保に改元された。

それほどに被害も甚大で、社会的な影響も大きかったのである。⁽³⁵⁾この推定は、本図の作成時期に加えて、描写内容から推定した本図の発注者の属性を鑑みた結果でもある。

発注者に関して：本図の伝来が不明であるので、作成時の発注者や

その意図を探るのは至難であるものの、冒頭に述べたように本図の描写内容の構成がかなりいびつであることが、発注者の属性を暗示しているように思える。繰り返しになるが、本図の大きな特徴のひとつは、右隻が伏見稻荷大社から描かれておりそれ以南の伏見や宇治のまちなみや村々は描かれていないことである。【図3】一方左隻は現在の大阪府との府県境となる宝積寺や離宮八幡まで描かれ、対照的な差となっている。【図4】但し左隻においても「洛外図」の定番として描かれる淀城をはじめとする淀地域は描かれていない。いまひとつは、桂離宮が全く描かれないか金銀砂子の雲に隠されているということである。【図181】桂離宮がある場所は水田の情景になっているようにも見えるし、金銀砂子の雲で隠しているのかもしれない。雲間から少しみえる民家は、桂離宮の北に位置する中桂村であると思われる。

以上のことから発注者は、京都奉行所関係者ではないかと推測するものである。自らの管轄外である伏見奉行所管轄、淀藩管轄地域を外し、禁裏関係の施設についても敢えて外して描かせたのではなかろうか。ただこれはあくまでも推論であり、現段階では実証はできていない。

ただ京都奉行所の関係者と考えれば、京郊村落の竹藪の表現へのこだわりや、特に二条城南東の辻番所といった、通常あまり気にも留めない施設を掲載していることも頷けるのである。また、文政京都地震による被災対応も京都町奉行所が前面に立ったのであり、地震を契機とした作成動機についても、

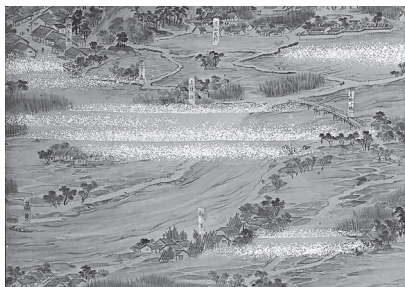


図 181 桂離宮あたり (左隻第6扇)

被災対応がある程度収まった時期に描かせたのかどうかなど疑問はあるものの、この時期にこれだけのものを描かせた発注者としてはふさわしいのではなかろうか。

絵画史上の位置づけ：本図の作品解説にあたって出発点としたのは、「洛外図」としての性格付けであった。本図が洛外を描く目的をもって作成されたことが明らかであることと、八曲一双という装丁であることがその理由である。「洛中洛外図」に比して圧倒的に数が少ない「洛外図」は、作品群の少なさに比例して研究も少ない。冒頭に述べたことと一部被るが改めて記しておきたい。筆者は民俗学が専門で、絵画史は素人である。だいたい洛中洛外図や祭礼図などの風俗画は、相当な優品については美術史の研究対象になるが、それ以外はあまり研究対象にはされない。ただ記録性という点においては、歴史学や地理学、民俗学（特に芸能史、民俗芸能）の研究者が好んで資料として使うことがある。本来は美術史家の見解を伺いたいところではあるが、ここは恥を忍んで、「京産大本」の絵画史上の位置について仮説的に記しておきたい。

16世紀の初頭から描かれ出した洛中洛外図は京都が政治的重要性を失うにつれ、その歴史的役割を終えたというのがこれまでの一般的な理解である。17世紀中頃からは洛中洛外図ではなく、京都を描く風俗画としての名所図へと移行していくというのもそうした流れのなかにあるわけだが、冒頭に紹介した4点の洛外図もまた同じ17世紀中盤から後半に制作が集中する。いわば洛中洛外図の終焉とともに、京都全体を描こうとする風俗図は名所図と洛外図の二方向に向かった時期があったということであろうか。両者とも洛外に目を向けたという点で共通するが、洛外図の方はその後続がなかった。

洛中洛以外図屏風の多くが六曲一双であるに対して、洛外図屏風は八曲一双である。現在知られている作品は、先述の京都国立博物館寄託中井家洛外図（江戸時代前期・「中井本」）、福田美術館蔵洛外図（江戸時代前期・「福田美本」）、神戸市立博物館所蔵洛外図（江戸時代前期・「神戸市博本」）、高槻市教育委員会蔵洛外図（江戸時代前期・「笹井家本」）の4点で、すべて17世紀

の中盤から後半にかけて制作されたもので、いずれも八曲一双の装丁である。これら4点に共通する特徴として、

- ・洛外を描く。名所である寺社の建造物とともに村々や道、橋などの構造物、川や滝、樹木などの自然物をも対象とする。

- ・人物は描かれない。

- ・真上から見た配置で描こうとしている。もちろん建物は斜め上からの俯瞰図ではあるが、道や川などとの配置を含めて描写は地図的である。洛外図研究を手掛けられる百瀬ちどり氏は自身のHPのなかで、中井家本の洛外図は、洛中の絵図作成と対の作業として描かれた可能性を指摘する⁽³⁷⁾。

- ・画面構成については、右隻は宇治から比叡山、左隻は北山から淀城を含んで大山崎近辺までである。

- ・金雲で画面を区切る異時同図であるものの、できる限り金雲を排し、名所や村々、道筋や河川などを詳しく描こうとする強い意図がうかがえる。というものである。

先述の人物表現の項で「吉川史料館蔵洛中洛外図」(「吉川本」)について簡単に紹介したが、「吉川本」は「京産大本」と共通する点があることはすでに述べたが、相違点もある。「吉川本」のような大名家の伝世品を比較対象にあげることにいささかなりとも気が引けるところではあるが、あえて両者を比較して列挙すれば、

(共通点)

- ・八曲一双の本間屏風である。

- ・洛中の描写は限定的で、画面構成上、名所図もしくは洛外図といえる構成である。

- ・人物が描かれる。

(相違点)

- ・「吉川本」は金雲を多用するが、「京産大本」は金銀砂子をなるべく抑えて描かれる。あるいは抑えて描こうという意識が感じられる。

・両者とも寺社を中心とした名所は描くが、「吉川本」は村々や道路や河川などはあまり描かない。「京産大本」は洛外の名所以外の描写にも気を配る。

・「吉川本」は描写が俯瞰図的であるが、「京産大本」は不完全ではあるものの、視点場を設定した一点透視図法に基づく鳥瞰図的な描写であろうと努力して描かれている⁽³⁸⁾。

・それゆえ「吉川本」に描かれる名所の画角は、それぞれの名所の特徴を描きやすい画角となっているが、「京産大本」は例えば東寺を北東側から描くというように、視点場からの見え方にこだわっている箇所が多い。

・描かれる人物の大きさから、「京産大本」の描写には遠近法が採用されているが、「吉川本」にはその意識はない。

ということが指摘できよう。

「京産大本」は形態としては八曲一双の屏風装で、描かれる内容も洛外なのであるが、すでに知られた洛外図の系譜上に位置づけるのは無理があるのではないかというのは当初より薄々は感じていた。というのも制作年代が違いすぎるのである。「吉川本」と比べても優に1世紀以上を経ており、先述の4点の洛外図からは1世紀半以上後の作品なのである。その間に制作された八曲一双の洛外図屏風はこれまで一点も見つかっていないのであって、今後発見される可能性はなくもないが、連続性の中で考えることには躊躇せざるを得ない。また描写内容からしても、洛外図の系譜上で考えるよりも、鳥瞰図と遠近法を融合させた「都市鳥瞰図」⁽³⁹⁾のひとつとして位置付けるのが妥当なように思う。

「京産大本」と同時期、江戸後期の都市図や景観図は、西洋絵画の影響を受けていることはすでに常識となっている。西洋絵画の影響として特に注目されてきたのが遠近法で、それを取り入れた嚆矢とされるのが、明和年間（1764－72）頃に描かれたとされる「うき糸京中一目細見図」（神戸市立博物館蔵）である。（岸文和 1997：11－12）「うき糸」＝「浮絵」とは西洋風の遠近表現のことを指し、同図はその名の通り、いわゆる一点透視図法で、祇園社の

上空あたりを視点として京都の西の方角を見た図である。しかしながらあまりに実験的過ぎたのであろうか、こうした一点透視図法による都市全体を対象とした描写はすぐには継承されなかったという⁽⁴⁰⁾。

少し時代は下がるが、横山崱山(1784-1837)の「花洛一覽図」(大倍判錦絵・文化5年(1808)⁽⁴¹⁾)、また歙形蕙斎(1764-1824)の「江戸一目図屏風」(六曲一隻・文化6年(1809))⁽⁴²⁾といった「都市鳥瞰図」が19世紀の初めに出現する。「江戸一目図屏風」は江戸の町を隅田川以東から見下ろした構図で、中央に遠景の富士山を配置し、江戸城や武家屋敷、寺社、魚河岸など、江戸の名所や有名な場所を描き込んでいる。雲や霞などで区切る手法はとらないが、場所に適した春夏秋冬の情景を描いていることからすれば異時同図ではある。小澤弘は「江戸一目図屏風」を「一点透視法でシームレスに仕立てた新しい都市景観図」とした。(小澤弘 1995: 200)「花洛一覽図」は、西山上空を視点場として、洛中と東山の風景を中心に描いたものである。西山や右京、比叡山の麓の村々等に雲をかけているので、完全なシームレスではない。

「京産大本」は人物の表現からしても遠近法を採用している。人物表現からすれば「江戸一目図屏風」よりも遠近法を強く意識しているといつてよいくらいである。鳥原の項で説明したような一部の例外はあるものの、近景の人物は大きく、遠景の人物は豆粒のように記されるのである。ただし完全な一点透視法ではない。先述のように両隻に描かれる建造物の向きから、視点場は洛中上空、それも二条か丸太町辺りと考えられるが、右隻の鴨川に架かる橋梁や、左隻の西山の諸寺社は同様の視点場から描かれたものではない。前者はかなり北方から、後者はずっと南の方角から描いたと考えられる。また本来まっすぐに通るはずの道が折れ曲げて表現されているのも、一点透視法からすればイレギュラーである。この点については「花洛一覽図」においても同様であり、基盤の目状である洛中の通りがカーブを描いているのである。

久保純一氏は、「江戸一目図屏風」以降の「鳥瞰図」について定義の再検討を行い、これらの「鳥瞰図」には厳密な一視点や一点透視図法によらない

ことを指摘し、「高低のある一点を想起させる視座から、透視図法的な空間の理解にもとづき、広範囲の地表を俯瞰したもの」という緩やかな定義を提示した。(大久保純一 2004 : 23) 大久保氏は今後の研究全体の進展を見越して便宜上緩やかな仮の定義をされたものと考えられるが、これであれば「京産大本」もその群の中に位置づけることが可能である。

しかしながらなぜ八曲一双の屏風装なのかということの解決にはならない。また先述のように「京産大本」は、右隻、左隻とも、第1扇から第4扇にかけては多くの金銀砂子を多用しており、シームレスな図ではない。「京産大本」は伝統的なやまと絵の手法を引きずっているのである。

筆者は長年、京都市の文化財保護の仕事に従事していた。その時に一般市民から、家蔵の洛中洛外図や祇園祭礼図などの検分依頼を何度か受けたことがある。なかには「これは」と思うものもあったが、ほとんどの場合裕福な商家とかに伝来した調度品で、おそらくは嫁入り道具として作られたもので、中世や江戸初期あたりの雰囲気醸し出そうとした創作絵画ばかりであった。もちろんそうしたものは美術史家の研究対象にはならないし、文化財の対象にもならない。よって世には知られにくく、いったい洛中洛外図などはいつ頃まで作られていたのか、どのくらいの作品が眠っているのかわからないが、京都では江戸時代を通して多くの洛中洛外図屏風が制作され続け、それを享受する人々がいたことは確かである。⁽⁴³⁾

確かに贅を尽くした美しさを引き出す素材としては適していることは無論だが、京都を描く手法としての屏風装のおさまりのよさということも作り続けられてきた理由であるように思う。京都は三方を山に囲まれ、南が開けた地形である。右隻に東山、左隻に西山を配し、町並みや名所を東西に分けて描くことは、京都盆地に住まう京都人にとっては、ごく自然に納得できる構図ではなかったか。先の「江戸一目図屏風」のように、ある一点から江戸全体を俯瞰するような作品は、江戸では大倍判錦絵のような一枚ものの摺で大量に出回ったが、京都ではそうでもなかったこともその証左ではなかろうか。⁽⁴⁴⁾

さらに京都画壇における、円山応挙以来の写生への傾倒がこうした風俗画にも影響を与えているのではないか。洛中洛外図や洛外図ではないが、江戸後期に描かれた祭礼図において、非常に丁寧に調査をしなければ描けない作品が京都にいくつか残されている。特に祇園祭の山鉦を描く作品では、何年にもわたって調査し下絵を描いたとしか考えられない作品が知られており、実際に調査下絵が残されているものもある。山鉦にかけられる胴幕や見送幕の文様を詳細に再現した作品があるのである。幕類は現物が現在も残っているので、その文様が細部まで一致することからも相当な労力を調査にかけて模写したことに疑いが無いのである。⁽⁴⁵⁾

こうした文化的土壌というものが「京産大本」作成の下地になっているように思うのであるが、素人の筆者にとってはいくら想像を膨らませても現段階ではここまでである。「京産大本」については、近々に京都産業大学関係のWEBにおいて公開し、広く識者の評価を俟てるように工夫するつもりである。今回はまず作品を紹介して、世に問う足がかりとする一稿であるのご理解いただきたい。

謝辞

最後になりましたが、本稿を執筆するにあたって多くの方々のご意見やご協力を得ました。特に洛外図研究の百瀬ちどり氏、郷土史家の坂田満氏には様々なご意見をいただきました。また洛外図の特別観覧をさせていただいた福田美術館の岡田秀之氏、高槻市立しろあと歴史館の川元奈々氏、そして吉川史料館の原田史子氏には、忙しい中お時間を割いていただき感謝に堪えません。その他にも多くの方々のご教示、ご指導をいただきましたが、お名前の表記に留まることをお許しいただきたく存じます。また本来は昨年度中に執筆する予定でしたが、生来の怠惰な性分により刊行が送れましたことをお詫びいたします。

協力者・機関一覧（敬称略・五十音順）

佐々木從久（今宮神社）／鈴木更紗（神戸市立博物館）／鈴木久男（京都産業大学日本文化研究所）／鈴木康久（京都産業大学現代社会学部）／志賀直祐（伏見稲荷大社附属講務本庁）／竹内直道（松尾大社）／玉城玲子（向日市文化資料館）／鳥羽重宏（城南宮）／中田治／仲林亨（八坂神社）／西澤暢晃／初田貞明／羽生由喜子（角屋もてなし

の文化美術館)／安井雅恵(京都市文化財保護課)

大阪くらしの今昔館／京都市文化財保護課／京都市歴史資料館／神戸市立博物館／国際日本文化研究センター／高槻市立しろあと歴史館／福田美術館／吉川史料館

注

- (1) 現「京産大本」に描かれている東寺前の牛車の描写(左隻第8扇)の部分図が、2011年の伏見学講座にて城南宮宮司の鳥羽重宏氏が紹介されたことが、2013年開催の第8回車石・車道研究会フィールドワークのリーフレットに掲載されていた。筆者はさっそく鳥羽氏に確認したところ、現「京産大本」を京都でも著名な美術商Tのギャラリーで拝見させてもらったが、2013年当時はすでに売却されてしまっていたとのことであった。すなわち本品は2011年段階では美術商Tの所蔵であったが、後に売却され、いずれかの時点で思文閣の所有となったものを今回京都産業大学が購入したことになる。思文閣が美術商Tから購入した可能性もなくはないが、おそらくは美術商Tから誰かが購入し、さらにそれを思文閣が手に入れたと推測できる。美術商は前所有者の情報は守秘義務のため絶対に漏らさないが、実は筆者にはだいたい見当がついていた。その方は中京で呉服商をされていた方で、美術品の目利きであり、ご自身もコレクターであった。残念なことに他界されご遺族も家屋敷を売却されたため、後追い調査が不可能となった。加えて氏の前の所有も美術商(美術商T)ということであれば、本品の伝来を追うことが困難を極めると予想されるので、今回は追跡調査をあきらめたことを記しておく。
- (2) 後述するように俯瞰図的とする方が妥当であろう。
- (3) 今宮神社の絵馬舎は桁行6間、梁行2間の大型のもので、「由緒書」には寛政11年建築となるが、「絵馬舎下惣敷石に寛政十二年四月 西陣今宮講」(『今宮神社文書』7426—212)とあることから、建築年代は寛政12年とした。
- (4) 国際日本文化研究センターデータベース https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/zoomify/mapview.php?m=001449503_o
- (5) 注20へ
- (6) 東海国立大学機構学術デジタルアーカイブ <https://da.adm.thers.ac.jp/item/n0001-20230901-86342>
- (7) 文政8年(1825)12月に嵯峨御所から松尾社司中にあてた文書に、「松尾社者、當御所(嵯峨御所=大覚寺のこと)御産神、依為格別之由緒、今般社頭樓門両脇並南門南之方江當境内有来候灰筋御築地之内長延五拾三間(約95m)、御寄附之御時候條」(※カッコ内筆者)とある。(松尾大社史料集編集委員会1978:137—138)
- (8) 角倉屋敷の桂川側に松並木を伴った広い空間が描かれている。「京産大本」のほぼ200年前に描かれた細川家伝来の「山城嵯峨図」(元和・寛永年間)にも同様の構成で角倉屋敷が描かれる。(熊本大学文学部附属永青文庫研究センター2011:

- 16)
- (9) 毎年7月27日、28日の住吉さんの例祭には、芸子総動員の練物が廓内外を練り歩いて賑わったという。
- (10) 伝承ではかつて薬園町に島原座という芝居小屋があり、後に映画館になったという。
- (11) 少し時代は上がるが、享保年間の島原の図によれば郭内中央を東西に「道中筋」という通りが走り、それに3本の通りが直行し、それぞれ両側町が形成され、都合6つの町が構成された。(田中泰彦編 1993: 24)
- (12) 同箇所には、「稻荷山稻荷大明神社江参詣、拝殿・御本社・中院・奥院、道筋鳥居式百廿五本、桧わたふき、何も結構成御宮也、奥院社縁之下ニ白狐出入候様子ニ而穴式ケ所有之、西三拾三ヶ国稻荷惣司由」と記している。「伊勢参宮日記」(上野家田中重義家文書)は、東京都世田谷区教育委員会 1984『伊勢道中記史料』に所収。)。
- (13) 下坂守氏は、宝寿院賢円が文化12年(1815)に幕府に対して出した修理願を採録しているが、その中に「屋根瓦葺大塔」の再興願いが述べられ、寛政7年の火災で焼失したことと、スケールを縮めた仮の塔を拵えたことなどを述べている。(下坂守 2021: 115 - 118)
- (14) 文化8年(1811)唐門再建、文政11年(1828)講堂再建、天保11年(1840)に総門が建立された。また嘉永元年(1848)に門前から白川筋までの道路ができた。杉本秀太郎・稲垣眞哲 1978: 146
- (15) 満願寺は京都市指定有形文化財であり、本堂・表門の建築年代は京都市文化財保護課の調査から得た。
- (16) 「中井家本洛外図」「笹井家本洛外図」とも同所辺りには「中山の観音」と付箋が貼られ、現在いうところの新長谷寺が描かれている。ちなみに新長谷寺は明治期に真如堂の境内に移築され、現在も洛陽三十三観音のひとつとして信仰を集める。
- (17) たとえば江戸時代後期の基本的な京都の地図といってよい「改正京町繪圖細見大成」(天保2年(1831)・文叢堂竹原好兵衛)には、村名として「しゅがくし」と記される。
- (18) 最下部の表現は、東寺(第8扇)、島原(第7扇)は北東方向からの俯瞰図として描かれており、洛中が視点場であることを示している。
- (19) それ以外にも例えば、焼失した壬生寺が文化8年(1811)に本堂が再建された等の事例も19世紀前半にはあるものの、「京産大本」の描写表現が明確でないものは【図159】からは外している。
- (20) 京都の河川文化がご専門の鈴木康久氏(京都産業大学現代社会学部教授・日文研所員)によれば、江戸後期の橋にこれだけ欄干が備わっていたことを知る資料としては他に類を見ないとのこと指摘を受けた。
- (21) 伝承では冷泉通り川端東に御旅所があったが、明治期の疏水工事により撤去され

たという。(村上忠喜 2013: 101)

- (22) これらの絵馬のうち 133 点は、2009 年、「三宅八幡神社奉納子育祈願絵馬」として重要有形民俗文化財に指定されている。
- (23) 梅宮社の神官で国学者でも知られた橋本経亮(1755～1805)の随筆「橘窓自語」の巻二に、「東梅律より上野むらにわたす橋を、上野の橋といへり。この橋は、元禄八、九年の比にはじめてかけたり。それまでは船わたしにて有けり。」と記す。「橘窓自語」(日本随筆大成編集部 1975『日本随筆大成』第 1 期 4 所収)橋本は上野橋に近い梅津に住んだ方であるので、伝承とはいえ信憑性は高いとしてよいと思う。
- (24) 『山城名跡巡行志』には、「上野ノ橋、当村ニ在り、土橋ナリ、桂河ヲ渡、東梅津ニ通」と記される。
- (25) 津村淙庵が寛政 4 年(1792)に大坂や京を旅行した記録『思出草』に、「砂川というふところに酒うる茶や、ちかき比より出来て色めける」とある。
- (26) 「城州鳥羽街道四塚町より淀小橋迄絵図」(個人蔵・宝永 7 年(1710))には、東寺門前の道は人道と車道を色分けして示しているが、四塚から南には車道のサインはない。後に造られたのか。(同図は大津市歴史博物館企画展図録『車石』を参照した。)
- (27) 『橘窓自語』には、北野社から平野にいたる切通の道は、天満宮八百五十年の時に初めて開いた。紙屋川沿いの二軒茶屋もこの時にできたと記されている。北野天満宮 850 年祭は 1752 年である。
- (28) 「京産大本」の画面から外れる、奈良街道沿いの伏見地藏、西国街道沿いの鳥羽地藏、そして東海道沿いの山科地藏は描かれていない。
- (29) 西国街道沿いの大山崎村は京・大坂の中間点で、地形的にも西山丘陵が途切れ、淀川との間に挟まれたところであり、東西の出入りに門があり黒門と称された。
- (30) 「三條大橋高札場絵図」(正徳元年(1711)・中井家文書)京都大学デジタル資料アーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00027120>
- (31) 元長岡京市史編さん室におられた百瀬ちどり氏は、乙訓の歴史に関する非常に充実した自身の HP「楓宸百景」(<https://chidori-kyuku.jimdoweb.com/>)の「竹アラカルト」で、「上ヶ竹」に関する史料を博搜して挙列している。
- (32) 東京都江戸東京博物館 2012『二条城展』の図録にも掲載されている。
- (33) 『京都御役所大概覚書』等を参照。
- (34) 丸山俊明氏が、安政 3 年(1856)に一条寺村百姓が京都町奉行所へ提出した 7 点の普請願書を資料として、北山型民家の再検討を促している。氏が資料とした普請願書には簡単な図面がつくが、そこには「ヒサシ」と記された大きな廂が記されている。(丸山俊明 2014)
- (35) 文政京都地震の被害については、三木晴男 1979、橋本学監修・大邑潤三・加納靖之著 2019 に詳しい。

- (36) 伏見奉行所管轄は『京都御役所向大概覚書』によれば、「右紀伊郡之内八ヶ村ハ先規諸大名屋敷跡地方御取ヶ計御代官支配、其外諸事御仕置先規ヶ伏見奉行支配、但川端堤御代官支配にて候得共普請等伏見支配、道筋 東天津海道勸修寺境迄、但左右之山ハ京都奉行所支配所司代制札有之、西竹田境杭有之、南小倉海道境杭有之、北稻荷迄町共ニ稻荷支配境有之、宇治海道上嶋境杭有之、六地藏小幡石田ニ境杭有之、」とあり、北は稻荷までの町となっている。また「八ヶ村」は、堀内村、大亀谷村、深草村、治部庄村、景勝村、六地藏村、三栖村、向嶋村のことで、そのなかの旧大名屋敷跡のみ京都奉行所管轄であった。
- (37) 百瀬ちどり氏の HP「楓宸百景」(<https://chidori-jyuku.jimdo.com/>)の「三思一言」
- (38) 「俯瞰図的」と「鳥瞰図的」と区分したのは、鳥瞰図的というのを一点透視法に基づく、すなわち上空に固定された一点から見た図のような描写として使い、俯瞰図的というのは斜め上空の複数の視点場からの描写として区分して使用したいためである。矢守一彦氏は、「鳥瞰図の定義は精粗いろいろあるようだが、一点透視画法であることまでは条件づけなくても、視座が(中略)平行移動するのではなく、一定点から一望したものを指すのであろう」と言う。(矢守一彦 1992: 27 - 28) ここでは、矢守氏の見方を踏襲して使い分けた。たとえば戦国期から江戸前期にかけての洛中洛外図などは俯瞰図的作品といえる。
- (39) この考え方は、佐藤琴氏の論文に大きな示唆を受けた。(佐藤琴 2010)
- (40) 都市全体ではなく、景観の一部を切り取ったものであれば、応挙の眼鏡絵などは一点透視図法による早期の作例といわれる。
- (41) 「花洛一覧図」は国立歴史民俗博物館や神戸市立博物館などに所蔵があり、国立歴史民俗博物館の WEB ギャラリーで詳細図を見ることができる。https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/karaku/karaku.html
- (42) 「江戸一目図屏風」は TRC-ADEAC 株式会社が制作・運営する、デジタルアーカイブの検索・閲覧を行うためのプラットフォームシステムで精細画像を閲覧できる。<https://adeac.jp/>
- (43) 西山剛氏は近世における洛中洛外図が、京都内部でどのような存在で、かつどのように受容されてきたのかについて問い直していく必要性をいう。(西山剛 2019)
- (44) たとえば「江戸一目図屏風」の複製ではないものの同じような描写内容の一枚ものの大倍判錦絵「異版江戸名所之絵」(鍬形蕙斎画)が文化 14 年(1817)あたりに出されている。また鍬形家三代目の蕙林も、一枚ものの大倍判錦絵「再刻江戸名所之絵」(国立歴史民俗博物館蔵)を出している。
- (45) たとえば中京の美術商所蔵の「祇園祭礼図屏風」や、下京の杉本家所蔵の「祇園祭礼図屏風」等。後者については少し時代は下がるが、画家村瀬玉田の詳細な調査図面が残されており、玉田が十年余りをかけて山鉾の装飾品を模写した事実が知れ

る。前者の画像は京都市自治 100 周年記念特別展「祇園祭の美―祭を支えた人と技―」実行委員会 1998：134 - 135 に掲載されている。

※『都名所図会』、『拾遺都名所図会』の画像はすべて国際日本文化研究センター DB を利用させていただいた。「京産大本」の画像はすべて川見善孝氏の撮影によるものである。

(参考文献)

明田鉄男 1990『日本花街史』雄山閣

井戸美里 2020「歌枕の再論と回帰―「都」が描かれるとき」(島尾新・宇野瑞木・亀田和子編『アジア遊学 246 和漢のコードと自然表象 16、7 世紀の日本を中心に』勉誠出版)

榎本直樹 1997『正一位稲荷大明神―稲荷の神階と狐の官位』岩田書院

大久保純一 2004「広重と江戸鳥瞰図」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 109 集、国立歴史民俗博物館)

大塚活美 2022「吉川洛中洛外図屏風の制作背景」(日本歴史学会『日本歴史』892、吉川弘文館)

天津市歴史博物館 2012『車石 - 江戸時代の街道整備-』天津市歴史博物館

小澤弘 1995「都市景観図の形成に関する一考察―「江戸一目図屏風」をめぐる―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 60 集、国立歴史民俗博物館)

川上貢 1988『建築指図を読む』中央公論美術出版

岸文和 1997「菊屋版《うきゑ京中一目細見圖》について―はじめての「都市鳥瞰図」―」(『國華』1214 号)

京都府教育庁指導部文化財保護課 2011『京都の文化財』

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター 2011『細川家運所 絵図・地図・指図編 1』(永青文庫叢書) 吉川弘文館

車石・車道研究会 (フィールドワーク実行委員会) 2013「第 8 回車石・車道研究会フィールドワーカー京都・鳥羽街道の車石探訪シリーズ(2)―」

神戸市立博物館 2000『絵図と風景―絵のような地図、地図のような絵』神戸市立博物館

国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館 2011 (人間文化研究機構連携展示図録)『都市を描く―京都と江戸―』大学共同利用機関法人人間文化研究機構

佐藤琴 2010「18 - 9 世紀の日本における都市図―歙形蕙斎筆《江戸一目図屏風》―」(佐々木千佳・芳賀京子編『都市を描く―東西文化にみる地図と景観図―』東北大学出版会)

下坂守 2021『中近世祇園社の研究』法蔵館

- 杉本秀太郎・稲垣眞哲 1978『古寺巡礼京都 23 禅林寺』淡交社
- 大丸二百五十年史編集委員会 1967『大丸二百五十年史』株式会社大丸
- 武田恒夫 1984「洛中から洛外へー洛中洛外図の成立と終焉をめぐるー」(『文学』52
- 3、岩波書店)
- 田中泰彦編 1993『京都遊廓見聞録』京を語る会
- 田中緑紅 1958『亡くなった京の廓上』京を語る会発行
- 玉城玲子 1989「京都と周辺部における竹材の貢納と流通について」(『向日市文化資料
館研究紀要』第 4 号 向日市文化資料館)
- 東京都江戸東京博物館 2012『二条城展 (江戸東京博物館開館 20 周年記念)』東京都江
戸東京博物館
- 東京都世田谷区教育委員会 (世田谷区立郷土資料館) 1984『伊勢道中記史料』東京都世
田谷区教育委員会
- 西山剛 2019「近世における洛中洛外図の受容」(杉森哲也編『シリーズ三都 京都巻』
東京大学出版会)
- 認定 NPO 法人古材文化の会 2019『今宮神社建築物調査報告書 [改訂版]』今宮神社
橋本学監修・大呂潤三・加納靖之著 2019『京都の災害をめぐる』小さ子社
- 伏見稲荷大社御鎮座千三百年史調査執筆委員会 2011『伏見稲荷大社御鎮座千三百年史』
伏見稲荷大社
- 松尾大社史料集編集委員会 1978『松尾大社史料集 文書篇 3』松尾大社
- 丸山俊明 2014「『一条寺村文書』の普請願書にみる愛宕郡一条寺村の民家形式」(『日本
建築学会計画系論文集』第 79 巻第 696 号)
- 三木晴男 1979『京都大地震』思文閣出版
- 向日神社崇敬会・向日神社 2018『御鎮座千三百記念向日神社史』
- 村上忠喜 2013「岡崎界隈の祭礼行事」(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
文化遺産部景観研究室編『京都岡崎の文化的景観調査報告書』)
- 『洛北上高野八幡さんの絵馬』編集委員会 2005『洛北上高野八幡さんの絵馬—三宅八幡
神社奉納育兒・成人儀礼関連絵馬調査報告書—』三宅八幡宮絵馬保存会
- 八坂神社 2020『八坂神社木殿及び歴史的建造物調査報告書』
- 矢守一彦 1992『古地図への旅』朝日新聞社

【表3】「京産大本」に描かれた橋一覧

No.	架橋場所	箇所	付箋	付箋の記述	種別	備考
1	高山寺の橋	左1	なし		木橋	清滝川にかかる。木造の橋脚がハの字に。刳橋。欄干あり。
2	西明寺の橋	左1	なし		木橋	清滝川にかかる。木造の橋脚がハの字に。刳橋。橋の中央に橋脚あり。欄干あり。
3	神護寺の橋	左2	なし		木橋	清滝川にかかる。木造の橋脚がハの字に。刳橋。橋の中央に橋脚あり。欄干あり。
4	大徳寺門前の橋	左2	なし		石橋	大徳寺寺域の
5	雲林院前の橋	左2	なし		土橋	雲林院の前、大徳寺の堀から出る川に架かる橋。この川は堀川に大宮通り沿いか。
6	雲林院前の橋	左2	なし		土橋	雲林院の前、大徳寺の堀から出る川に架かる橋。大宮通り沿いか。橋脚あり。
7	渡猿橋 愛宕参道の橋	左3	なし		木橋	愛宕参道二の鳥居あたり。清滝川にかかる。木造の橋脚がハの字に。刳橋。橋の中央に橋脚あり。欄干あり。
8	高橋	左3	あり	高橋	土橋	
9	紙屋川にかかる橋	左3	なし		木橋	欄干あり。擬宝珠の様なもの。平野神社へ向かう橋か。橋脚は石橋。
10	紙屋川にかかる橋	左3	なし		土橋	北野社側あたりからお土居を抜けて平野社の方へ。簡素な造り。
11	五智山へ至る道の橋	左4	なし		土橋	橋脚あり
12	紙屋川にかかる橋	左4	なし		木橋	欄干あり。妙心寺へ至る道にかかる。大將軍神社の南側を抜ける道にかかる橋か。
13	渡月橋	左4, 5	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
14	渡月小橋	左5	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
15	下嵯峨村内の橋	左5	なし		土橋	橋脚あり。
16	下嵯峨村内の橋	左5	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
17	下嵯峨村内の橋	左5	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
18	常盤村の東	左5	なし		土橋	橋脚あり。御室川にかかる。
19	安井村から木鳥社	左5	なし		土橋	橋脚あり。御室川にかかる。
20	安井村から木鳥社の北	左5	なし		土橋	橋脚あり。御室川にかかる。
21	安井村から木鳥社の北	左5	なし		木橋	板をかけただけの橋だが橋脚あり。何川か不明。御室川の支流か？
22	北野経堂あたりから紙屋川に	左5	なし		土橋	橋脚あり
23	大將軍社あたりから紙屋川に	左5	なし		石橋	欄干あり。
24	木辻村に至る道、紙屋川に	左5	なし		土橋	橋脚あり。
25	安井村に至る道、紙屋川に	左5	なし		土橋	橋脚あり。

26	上野橋	左6	あり	上野橋	木橋	橋脚、欄干あり。踊り場あり。
27	西院村の西、御室川に	左6	なし		土橋	橋脚あり。
28	御室川にかかる。郡村か？	左6	なし		土橋	橋脚あり。川はそのまま桂川に流れ込んでいるよう。
29	西院春日神社の前の道	左6	なし		石橋	石の板のように見える。
30	千本四条の橋	左6	なし		土橋	橋脚や橋枠は石橋のように見える。西洞院川にかかる？たもとに茶店らしい建物
31	光明寺の前の堀川	左7	なし		石橋	石板を三枚渡す
32	西七条村西側の橋	左7	なし		石橋	石板を二枚渡す。この川は天神川だろうが、第6扇からのつながりが不明。
33	柳谷観音前	左8	なし		木橋か	
34	奥海印寺の下手	左8	なし		木橋	小畑川に架かる橋か。欄干あり。
35	長岡天神の上方	左8	なし		石橋	石板を二枚渡す。
36	八条ヶ池内の橋	左8	なし		木橋	橋脚あり。
37	向日明神の南側	左8	なし		土橋	
38	上久世村内の橋	左8	なし		石橋	石の板のように見える。
39	久世橋	左8	あり	久世ノ橋	木橋	欄干あり。橋脚あり。
40	川勝寺村の東	左8	なし		石橋	欄干あり。橋脚あり。
41	吉祥院の横	左8	なし		土橋	橋脚あり。
42	四ツ塚の九条通りに架かる橋	左8	なし		木橋	欄干あり。橋のたもとに灯台あり。
43	上鳥羽あたり、鳥羽街道から	左8	なし		石橋	石板を二枚渡す。
44	遍照心院前の道	左8	なし		石橋	石板を二枚渡す。
45	大和大路の二の橋か	右1	なし		木橋	欄干あり。
46	五条大橋	右1	あり	五條橋	木橋	石橋の橋脚。欄干あり。擬宝珠あり。
47	松原通り高瀬川にかかる橋	右1	なし		木橋	欄干あり。橋下に船曳き用の通路がある。
48	東福寺から泉涌寺に至る道の途中の橋	右2	なし		木橋	欄干あり。
49	西大谷の前の橋	右2	なし		木橋	欄干あり。後のめがね橋か。
50	松原通り鴨川の中洲にかかる橋	右2	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
51	松原通り鴨川の中洲にかかる橋	右2	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
52	高瀬川にかかる橋	右2	なし		木橋	欄干なし。橋脚なし。橋下に船曳き用の通路がある。
53	四条小橋 四条高瀬川にかかる橋	右2	なし		木橋	欄干あり。橋脚なし。橋下に船曳き用の通路がある。

54	四条通鴨川中洲にかかる橋東側	右3	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
55	四条通鴨川中洲にかかる橋中央	右3	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
56	四条通鴨川中洲にかかる橋西側	右3	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
57	三条小橋	右3	なし		木橋	欄干あり。擬宝珠
58	現在の華頂道が白川にかかる橋	右4	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
59	現在の東山通が白川にかかる橋	右4	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
60	大和大路四条上るで白川にかかる橋	右4	なし		石橋	欄干あり。橋脚あり。詳細に描かれている。
61	三条大橋	右4	あり	三條大橋	木橋	石橋の橋脚。擬宝珠。橋の中央をまっすぐ桁のような材が通る。右脇に車道。
62	二条通りで中洲にかかる橋（西側）	右4	なし		木橋	橋脚あり。欄干なし。木の板を渡した簡便なもの。
63	若王子神社鳥居前の橋	右5	なし		石橋	欄干あり。
64	南禅寺から黒谷への方へかかる橋	右5	なし		木橋	橋脚あり。欄干あり。
65	白川橋	右5	あり	白川橋	石橋	橋脚あり。欄干あり。右横に車道。
66	二条通りで中洲にかかる橋（東側）	右5	なし		木橋	橋脚あり。欄干あり。
67	丸太町通りで中洲にかかる橋（東側）	右5	なし		木橋	橋脚あり。欄干あり。
68	丸太町通りで中洲にかかる橋（西側）	右5	なし		木橋	橋脚あり。欄干なし。簡便なもの。
69	荒神口通りで中洲にかかる橋（東側）	右5	なし		木橋	橋脚あり。欄干なし。簡便なもの。
70	荒神口通りで中洲にかかる橋（西側）	右5	なし		木橋	橋脚なし。板を渡しただけ。2カ所あり。
71	現今出川通りで中洲にかかる橋（東側）	右6	なし		木橋	橋脚あり。欄干あり。
72	現今出川通りで中洲にかかる橋（西側）	右6	なし		木橋	橋脚あり。欄干あり。「出町口」と付箋あり。
73	高野川との合流点で中洲にかかった橋	右6	なし		木橋	橋脚あり。板を渡しただけ。2カ所あり。
74	賀茂川の中洲にかかる橋	右6	なし		土橋	橋脚あり。
75	玉山社近辺で高野川にかかる	右7	なし		土橋	橋脚あり。
76	三宅八幡社参道で高野川にかかる	右7	なし		木橋	橋脚あり。欄干あり。橋のたもとに茶店。花園橋か。

77	山花から松ヶ崎へ高野川の中洲にかけられた橋	右7	なし		木橋	橋脚なし。板を渡しただけ。2カ所あり。このあたり川中に石がごろごろあり、そこに板を渡している。
78	干葉寺辺りから下鴨へ高野川にかかる	右7	なし		不明	欄干なし。御蔭通りにかかる橋か。
79	河合社から明神川？にかかる橋	右7	なし		木橋か	欄干あり。
80	下鴨社の西鳥居の外にかかる橋	右7	なし		木橋か	欄干あり。
81	下鴨社の南鳥居の外にかかる橋	右7	なし		木橋か	欄干あり。
82	葵橋か	右7	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
83	八瀬の集落内の橋	右8	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
84	八瀬集落の下流にかかる橋	右8	なし		木橋	欄干あり。橋脚あり。
85	上賀茂社一の鳥居東側明神川にかかる橋	右8	なし		木橋	欄干あり。
86	賀茂川の中洲にかかる橋・上賀茂社参道（東側）	右8	なし		木橋	橋脚あり。板を渡しただけ。
87	賀茂川の中洲にかかる橋・上賀茂社参道（西側）	右8	なし		木橋	橋脚あり。板を渡しただけ。

